

第 68 回国連女性の地位委員会(CSW68) 派遣報告書



公益財団法人 日本 YWCA

人権・ジェンダー委員会

内容

1. 概要.....	2
1.1. 国連女性の地位委員会(CSW)とは	2
1.2. CSW68 における日本 YWCA の活動	3
1.3. 国連経済社会理事会との協議資格を有する NGO としての文書提出	4
1.4. CSW68 に向けての準備会	7
1.5. 現地派遣者スケジュール	8
2. 派遣者自己紹介:参加動機、成果、今後について.....	9
3. 日本 YWCA 主催パラレルイベント	21
3.1. イベント概要	21
3.2. パラレルイベント全体報告.....	22
3.3. 派遣メンバー個人の感想.....	24
4. 派遣中プログラム参加報告.....	33
4.1. 現地派遣メンバー全員が参加したプログラム	33
4.2. 印象深かったプログラムの報告	40
4.3. 期間中の SNS 発信.....	56
5. 派遣期間中の写真.....	63

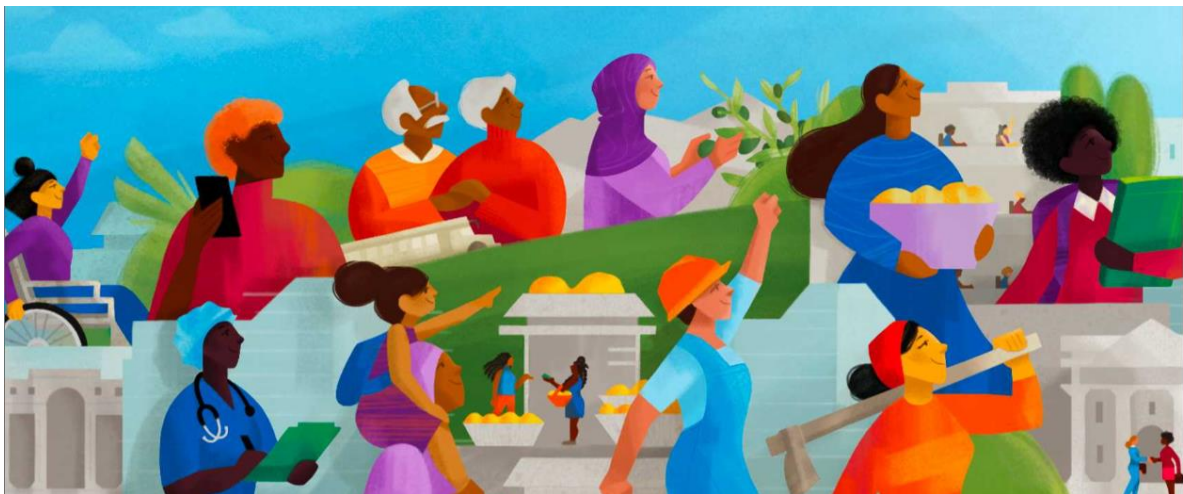
1. 概要

1.1. 国連女性の地位委員会(CSW)とは

毎年3月の2週間、米国・ニューヨークの国連本部にて開催される、女性の地位向上を目的とした国連加盟国の会議。国連経済社会理事会(ECOSOC)の機能委員会の一つで、1946年6月21日に、女性の権利を促進する提言と報告をまとめることを目的として設置されました。

同会議には、加盟国の代表、国連諸機関に加えて、毎年1,000以上のNGOの参加があります。NGOは、政府や国連機関に情報提供や提言を行う主体として、文書提出、発言、イベント実施やロビイングを行います。

世界YWCAは1946年のCSW発足に大きく貢献し、その発足当初から毎年参加してきました。近年は、CSWへのユースの参加に関してUN Womenとの協働で大きな役割を果たしています。日本YWCAは、国際的なリーダーシップ育成の機会として、毎年この会議にメンバーを派遣しています。2019年には国連経済社会理事会との協議資格を得て、更に活動の場を広げています。



1.2. CSW68 における日本 YWCA の活動

日本 YWCA は、第 68 回国連女性の地位委員会(CSW68)に、7名のユース会員を派遣しました。

●期間:2024年3月10日(日)~16日(土)

●派遣メンバー

臼杵 ふたば・小川 真理絵・片桐 碧海・住谷 友結・吉田 弥生(東京 YWCA)、東上 菜々子・柳 瑠音
(京都 YWCA)

担当職員:臼井 一美、畠 舞衣子(米国現地派遣)

●Priority theme (主要テーマ): “Accelerating the achievement of gender equality and the empowerment of all women and girls by addressing poverty and strengthening institutions and financing with a gender perspective”.

(貧困に対処し、ジェンダーの考えとともに制度を強化、資金調達をすることで、ジェンダー平等とすべての女性と少女のエンパワメント達成を促進する。)

●Review theme(レビュー・テーマ): “Social protection systems, access to public services and sustainable infrastructure for gender equality and the empowerment of women and girls. (Agreed conclusions of the 63 session)”

(ジェンダー平等と女性と少女のエンパワメントのための社会保護システム、公共サービスならびに持続可能なインフラへのアクセス。)(CSW63 の合意結論)

日本 YWCA は、今回の CSW68 において以下の活動を実施しました。

- ① 国連経済社会理事会との協議資格を有する NGO としての文書提出
- ② 現地ニューヨークでのパラレルイベント主催、イベント参加ファシリテート
- ③ オンライン・対面でのイベント傍聴、SNS でのイベント内容報告

1.3. 国連経済社会理事会との協議資格を有する NGO としての文書提出

日本 YWCA は、CSW68 のテーマに沿い、国連へ文書を提出いたしました。

【全文(日本語訳)】

第 68 回国連女性の地位委員会(CSW68)へのステートメント

日本 YWCA は 1905 年に設立され、1906 年に世界 YWCA に加盟しました。2019 年に国連経済社会理事会への特別協議資格を認められました。今回も国連へ文書提出を行えることを嬉しく思います。

日本 YWCA は、アジア・太平洋戦争において、日本が東アジア地域を植民地支配してしまったことやその地域の女性たちを軍事性奴隷にしてしまったことなどをはじめとする多くの加害責任を、組織としてまた会員個人としても担っていくべく、学びを深め、東アジア諸国の YWCA のメンバーから経験や痛みを分かち合わせ協働しながら歩んできました。

同時に、ジェンダー正義が行われる公正な社会を目指して、女性の社会参画を進め、人権や健康や環境が守られる平和な世界の実現を目指し、そのために周縁化された人たちのエンパワメントの活動を行っています。わたしたちはすべての個人、特に女性たちが市民的権利を保障され完全に行使できるようになるべきであり、特に若い女性の声が聞かれ、重視されるべきだと信じます。

CSW63 の折、日本 YWCA から派遣したユースたちはとてもエンパワメントされて帰ってきました。終了後すぐさまプログラムを立ち上げ、日本の中にある地域 YWCA での活動をはじめました。彼女たちは「性的同意」を中心に、自分たちが中学生・高校生のときに受けられなかった「包括的性教育」を日本 YWCA のメンバーである中高 YWCA を中心に 10 代の少女に伝えたいと考え、自分たちで

内容を考え、丁寧で誠実な準備を重ね、ワークショップを行っています。またその中で、性に関する犯罪における刑法の不備なども指摘し続けています。ユースたちが世界 YWCA の若い女性のリーダーシップ養成事業「Rise Up！」の働きと呼応しながら、CSW でのエンパワメントと日本中の YWCA の応援をもって、あきらめずに進んでいく姿は YWCA のメンバーや彼女たちのワークショップを受けた少女たちにとっても、大きなエンパワメントになっています。また彼女たちの思いは他のユースにも伝わり、現在多くのユースがジェンダー、平和、人権などのテーマに関心を持ちその働きに関わっています。

しかし、日本は性的な事柄をタブーとする社会的状況があり、文部科学省を中心としているカリキュラム作成において、学校における義務教育の中で「性交を直接的に教えない」という方針が続いています。日本では、コロナ禍の児童ポルノ動画などオンラインでの子どもの性的搾取の増加が問題となりました。日本 YWCA から派遣されたユースは、CSW67 の発表で本件を取り上げ、性教育、IT リテラシー教育を人権教育の一貫として組み込む重要性を訴え、実施を求めました。このように、ユースたちは果敢に日本での人権教育と性教育の遅れを指摘し、声を上げ続けていますが、若い女性や少女たちの声は聴かれず、人権は侵害され続けています。

また日本はコロナ禍の影響と政治の無策があり、経済的な状況は悪くなっています。その中で、特に女性たちの状況は悪くなる一方です。会社組織における評価制度や、育休・産休の不備による若い女性たちが抱えさせられている困難、ひとり親家庭(特に女性)の就労困難・貧困、起業する際の資金調達の難しさなど、多くの課題が累積しています。

また、社会的養護を必要とする少女たちが増えています。その原因には家父長制に起因する支配の構造や、暴力を肯定する社会的文化を変革することができていないことなどがあり、経済的困窮に起因する場合もそうでない場合もありますが、経済的困窮が社会的養護につながっていることも事実の 1 つです。また、社会的養護を受け、施設などを利用することになると高等教育(短期大学、高等専門学校、大学以上の教育)をあきらめなければならないことが多く、結果的に貧困の連鎖から抜けられないということが起こります。日本の 2 つの地域 YWCA が社会的養護を必要とする若い女性・少女たちの

ための施設運営をおこなっています。利用者の多くはいわゆる血縁の「家族」から暴力(身体的・精神的・性的・経済的など)を受けています。彼女たちにはあらゆる方面でのエンパワメントが必要です。

以上のような状況の中で、国連、そして各国政府に以下のことを強く望みます。

【国連】

1. 若者、特に若い女性と少女たちの声を聴くための枠組み・メカニズムが構築され、あらゆる意思決定の場において、必ず若い女性たちの声が反映されることが必要です。経済的な理由で、国連本部に行けないユースの声を聞くための仕組みを構築してください。また、同理由から最も物価の高い都市の一つであるニューヨークでの CSW での開催の見直しを求めます。
2. 社会的養護を必要とする特に若い女性と少女たちに、必要なケアとエンパワメント、そして教育が適切に受けられるよう働きかけていくことが必要です。

【各国政府】

1. ユネスコ(国際連合教育科学文化機関)の「国際セクシュアリティ教育ガイダンス【改訂版】」に準拠する包括的性教育が日本でも世界でも行われることが必要です。
2. 各国政府代表のユースへの渡航費や滞在費の補助を求めます。
3. あらゆる人の性と生殖の健康と権利が守られるため、法律を含めた制度の強化、医療機関・相談機関へのアクセシビリティを強化してください。
4. 国家予算を軍事費や防衛費ではなく、ジェンダーの考えに基づいた教育と貧困対策に充ててください。

この文書提出の機会に感謝し、NGO コミュニティならびに国連女性の地位委員会、国連経済社会理事会とともにこの重要な問題の前進に取り組むことを楽しみにしています。

1.4. CSW68 に向けての準備会

日本 YWCA は、スタッフと派遣者による CSW68 のパラレルイベント開催のため準備会 5 回、日本の方向けのイベント、そして振り返りの会を行いました。

- ・第 1 回準備会: 2023 年 11 月 29 日(水) 19:00~21:00 オリエンテーション、各自の興味関心領域について
- ・第 2 回準備会: 2023 年 12 月 19 日(火) 20:00~22:00 CSW 目標確認、パラレルイベント骨組み
- ・第 3 回準備会: 2024 年 1 月 18 日(木) 19:00~21:00 各自発表準備進捗確認
- ・第 4 回準備会: 2024 年 2 月 6 日(火) 19:00~21:00 各自発表準備進捗確認
- ・日本の方向けイベント(リハーサル) 2024 年 2 月 28 日(水) 19:00~21:00
- ・第 5 回準備会: 2024 年 3 月 5 日(火) 19:00~21:00 リハーサルを受けて、最終確認
- ・振り返りの会: 2024 年 4 月 19 日(金) 19:00~21:00

1.5. 現地派遣者スケジュール

YWCA 関係イベント・集会情報(+UNWOMEN 関連イベント)								
	3/10(日)	3/11(月)	3/12(火)	3/13(水)	3/14(木)	3/15(金)	3/16(土)	3/17(日)
午前	<p><参加必須> 9:30 グラ ウンドパス 取得</p>	<p>9:00 朝 MTG@国連本 部 <参加必須> 10:00- オ プニング傍聴</p>	<p>朝 MTG</p>		<p>朝 MTG</p>	<p>朝 MTG <参加任意> 8:00~9:30 日本政府サイド イベント <参加任意> 8:30-10:00 香港 YWCA</p>	<p>朝 MTG ユース ユースフ ォーラム 9:00- 17:00</p>	<p>ユース フォーラ ム 9:00- 13:00</p>
午後	<p><参加任意> UN 構内ツ アー、ランチ</p>	<p><参加任意> 14:30- 16:00 パレス チナ YWCA @ACC Y Room <参加必須> 16:30- 18:00 世界 YWCA</p>		<p>イベント直前 MTG 14:30- 16:00 日本 YWCA イ ベント @CCUN Drew</p>	<p><おすすめ> 15:00- 18:00 UNWOME N 各国ユース 代表と主要 テーマにつ いてインタ ラクティブ・ ダイアログ</p>	<p><参加任意> 12:30- 14:00 韓国 YWCA 16:45-18:00 ユースフォーラ ム</p>		
夜			<p><対象者の み> 18:00- アメリカ YWCA レセプション &チャット</p>	<p><参加必須> 18:00-19:30 日本政府ブリーフ ィング <参加任意> 19:45-韓国 YWCA 代表団と 会食</p>		<p><参加任意> 18:30-20: 30 振り返りの会</p>		

2. 派遣者自己紹介:参加動機、成果、今後について

臼杵 ふたば

・自己紹介・参加動機

東京 YWCA 会員の臼杵ふたばです。私は現在、国内の女子大学に通う学部 4 年生(派遣時は3年)です。生活者とジェンダーの視点から社会科学を学ぶ専攻に所属しています。

特にこれまで私は、大学内外で日本の教育・政治分野を中心に議論を進めてきましたが、その中で常に国外の動向が、日本との比較対象として提示されます。それらの比較対象の実情を確認してみたい。そう思い、ジェンダー分野の国際会議である CSW68 への参加を決めました。

・成果

今回の派遣を経て、成果は大きく2つあります。

第一に、“Gender Mainstreaming”(=「ジェンダー主流化」)の重要性を実感したことです。これは、今後活動していく上での軸になると感じています。

今回の日本 YWCA の派遣メンバーは 7 人とも異なる分野・フィールドで活躍されている方々で、バックグラウンドが多様な彼女たちの意見は、私にとってとても新鮮で、派遣前のミーティングからとても充実した時間を送ることができました。現地で出会った方々も、多様な分野で活動されていて、むしろ「ジェンダー」というメガネをかけて社会を見ていることだけが共通点でした。だからこそ、他分野で活躍するフェミニストと連帯する必要があると思い、“Gender Mainstreaming” が重要だと確信しました。

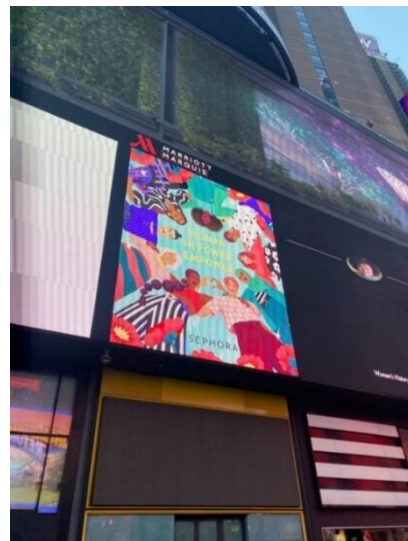
日本 YWCA のパラレルイベントを含め、各イベントの内容は、どのような国・地域、分野においても女性の声が見逃されていることが頻出していたように思います。意思決定層に女性が少ない、文化・宗教的に男性のみに機会があるなど、状況はさまざまです。昨今のジェンダー平等の取り組みは、「ジェンダー」という言葉だけが先走ってしまっていることもあります。「ジェンダー分野」が「縦割り」になってい

では、社会は変わりません。あらゆる分野に男性が関わっているように、「ジェンダー」という視点が組み込まれる必要があります。だからこそ、“Gender Mainstreaming” が重要であり、各分野で“Gender Mainstreaming”が進めば、包括的にジェンダー平等が実現できると考えます。

第二の成果としては、ネットワーキングができたことです。

国内外のフェミニストとコンタクトが取れることは、活動をしていく上で励みになります。韓国 YWCA のユースの方とはオンラインで交流をしており、また日本のユースとも次の CSW 69 の引き継ぎに向けて動いています。ユースだけでなく、国連関係者や、日本の別の派遣団の方にもお世話になり、研究や活動のアドバイスをいただいています。

そして、現地 NY でお会いした方々はもちろん、何より日本 YWCA の派遣メンバーと出会うことができたことが大きな糧です。上記の派遣メンバーたちとは、現地でも熱く諸課題について語りあい、そんな彼女たちと活動できたことが最高の出会いでした。本当に感謝しています。



・今後について

今後の取り組みとしては大きく3つの動きをとります。1つ目は、研究・教育活動やメディアを通して、次世代に CSW での取り組みを伝えていくことです。日本政府からは、毎年本会議に出席していますが、行政の HP、各種メディアを通して、会議の動向が読み取れません。その結果 CSW 自体が市民に認知されていないように感じています。そのため早速、同じ派遣メンバーの瑠音さんと、新聞社に対し、取材を受けてもらえるように動いています。

2つ目は、パラレルイベントの中で発言した“Leadership”の実現のために努めていきます。「社会科
教員となり、ゆくゆくは法・政治分野に関わる」ことを今後の目標として掲げました。今回経験したすべ
てを今後の活動に取り入れていけると確信しています。日本の社会科教育では「国際連合の働き」を学
ぶことが必修化されており、今回の経験は教科教育研究としてのフィールドワークの一環にもなりまし
た。また各国政府関係者の様子を間近で確認できたことは貴重な経験となりました。そして、実現した
際には上記に示した通り、“Gender Mainstreaming”を意識した教育・社会活動を行います。

3つ目は NGO での活動にも注力することです。本派遣を機に YWCA の会員になりましたが、歴史
ある YWCA の一員として活動できることがとても誇りです。今後も私のライフワークとして活動させ
ていただきたく思います。

小川 真理絵

【自己紹介】

1994年生まれ、東京都出身です。

都内の国立大学の博士課程に通いながら、大学の講師として働いています。専門は教育工学です。その
傍ら、モデルやピアニストとして働いています。

【参加動機】

勤めている大学のチラシコーナーに立ち寄ったときに、CSW68の案内をみました。

祖父が生前国連で働いていたこともあり、「国連」という言葉に、強く心がひかれました。また私自身も
ジェンダーに関わるテーマで修士論文を執筆しており、興味のある分野でした。

【成果】

パラレルイベントを行うにあたり、自分の原稿やスライドを何度も書き直しました。大変でしたが、自
分の考えがまとまり、良い機会でした。ニューヨークでは、パラレルイベント、サイドイベントが多く行わ
れ、私は自分が興味のあるものを中心に出席していました。国によって抱える事情が異なっていたり、
または日本と同じ状況だったり、とても視野が広がりました。

【今後について】

今回の CSW68では、対面だけでなく Zoom 等を用いてバーチャルで行われるイベントもたくさんあり、今後もオンラインという形で積極的に参加して、考えを深めていき、情報のブラッシュアップとキャッチアップを行いたいと思います。

片桐 碧海

私は、社会格差についてもっと知りたい、是正に努めたいと考え、思春期や、LGBTQ+の方々のメンタルヘルスについて研究を行っています。国連フォーラムのメーリングリストで CSW ユース参加者の募集を知り、ヘルス以外の観点からもジェンダー課題について学びたい、研究だけでなく、アドボカシーという方法でジェンダー課題にアプローチしたいと考え、応募し、YWCA にも加入しました。CSW68 で最も大きかった学びは、サイドイベントやパラレルイベントを通じて、日本 YWCA ユースメンバーと深く議論できたことにあると思います。CSW68 には、世界各国からジェンダー課題に問題意識を持っている人、取り組んでいる人が集まります。国連本部内の重厚な扉の向こうで開催されるサイドイベントに加え、さまざまな NGO 団体が開催するパラレルイベントも多数並行して開催されました。日本の参加者は ESTA さえあればニューヨーク国連本部を訪問できますが、中にはビザの申請に 4 ヶ月近く要した方、過去に取得したビザでなんとか入国できた方も参加していました。彼女たちにとっていかに意見を表明するまでのハードルが高いかを実感する一方で、ビザ問題を抱えるのは多くの場合が中低所得国ですが、それらの国から来たと話す方々は身なりが良く、ブランド品や宝飾品をたくさん身につけ、自国において富裕層であることが伺えました。講演者の中には、貧しい家庭で育ち、自身の力で現在の地位や活動までたどり着いた、と話す人もいましたが、多くの場合は、自身も含め、恵まれた環境、あるいは格差社会の恩恵を受けている立場の人が CSW に集まっていると感じ、矛盾ややるせなさも感じました。このモヤモヤを共有し、CSW 終了後にどのように次につなげていけば良いのかを YWCA ユースメンバーと夜な夜な語り合えたことは、自身にとって大きな収穫でした(写真 1)。

私は現在大学院生です。卒業後は、研究の腕を磨き、将来的には国際機関でグローバルヘルス課題の解決に努めたいと考えています。この世界に変化をもたらすためには、論理的にエビデンスを示す研究

の経験だけでなく、人々の五感に訴えるアドボカシー活動の経験も身につける必要性をより一層実感しました。まずは YWCA の活動を通してジェンダー課題をはじめ、格差に関連するあらゆる社会課題について学び、国内および国外に広げる活動に携わりたいと思います(写真 2)。

(写真 1)日本 YWCA ユースメンバーで夜食買い出しの様子



(写真 2)他国 YWCA メンバーとの様子

住谷 友結

私は現在、大学院で国際看護を学ぶ学生です。将来は、グローバルヘルスの分野で、ジェンダーの視点を持ちながら諸課題の解決に貢献したいと考えています。SDGs のゴール 5(ジェンダー平等)の達成は、すべてのゴールの土台であり、健康や福祉の向上にも不可欠だと認識しています。

こうした問題意識から、ジェンダー平等と女性のエンパワメントについて議論する CSW の場に参加し、世界の動向を学びたいと考えました。

CSW68 への参加を通じて、以下の 2 点が特に大きな成果となりました。

1. ジェンダー平等の実現に向けた世界の取り組みの現状と課題を理解した
2. グローバルな視野とネットワークを得ることができた

1 点目については、各国政府や市民社会の報告から、ジェンダー平等の進捗状況や、コロナ禍で浮き彫りになった女性と女児の脆弱性など、多岐にわたる課題について理解が深まりました。

2点目に関しては、世界各地の市民社会リーダーとの交流を通じて、ジェンダー平等の推進には国境を越えた協働が不可欠であることを実感しました。グローバルな視野を培うとともに、今後の活動の基盤となる人的ネットワークを得ることができました。

CSW68 で得た学びを基に、今後は以下のような取り組みを進めていきたいと考えています。

- 大学院での研究を通じて、ジェンダーとグローバルヘルスの関わりについての知見を深める
- 将来の進路においても、ジェンダーの視点を大切に、女性と女児の健康と権利の促進に貢献する

CSW68 への参加は、ジェンダー平等の実現に向けて行動を起こすための大きな原動力となりました。学生としてできることを一つ一つ積み重ね、より公正な社会の実現に寄与していく決意です。看護の現場でも、ジェンダーの視点を持つことの重要性を発信し続けたいと思います。多様な立場の人々と手を携えながら、ジェンダー平等という目標に向かって歩んでいきたいです。



吉田 弥生

私は中央大学法学部2年の吉田弥生です。私がジェンダー問題に興味を持ったきっかけは、大学1年生の時にカンボジアにインターンシップに行ったことです。現地の女性の権利を向上させるために、経済的独立を支援し裁縫など手仕事を提案しました。その際に、ジェンダーの問題は根が深く、さらに世

界的なものだと知りました。他国がどのような現状なのか気になり、CSW の存在に興味を抱きました。

私が数多の団体の中から YWCA を通して CSW68 に参加をしたいと思った理由は2つあります。1つ目は YWCA の理念に賛同したからです。キリスト教・女性・国際という3つの柱をもとに、すべての人が等しく平和に生きられる社会の構築に協力したいと思ったからです。2つ目は、YWCA は世界的な団体だということです。国内にも 24 の地域 YWCA があり、37 の学校 YWCA があります。また、世界 100 以上の国と地域で活動しています。同じ団体ゆえに目指している世界も一緒であり、考え方も近い。そういった信念が似通った人たちと共に参加することで、より多くの学びを得られると考えたからです。

実際に CSW68 に参加して得た成果は大きく2つあります。今までテキスト上でしか知らなかった現状を実感したこと、私自身の成長です。

CSW のパネルの前で記念撮影



1つ目の世界のさまざまな諸問題を自分事として引き付けられたのは、1日目の3月11日(月)にあったパレスチナ YWCA のサイドイベントへの参加の影響が大きいです。私は、パレスチナ問題の背景やニュースは一応の理解はしていたつもりでしたが、喫緊の問題としては認識できていませんでした。しかし、実際にパレスチナ出身の人の話を聞いて、現状の悲惨さや深刻さを思い知りました。国内でも自由に移動できない、自由な飲食が認められない、言論も見張られているという現実、実際に経験して

きた絶望感を伴った語り口でした。話を聞いただけの私でさえ心に重いものがのしかかってきましたが、きっと経験した方々はもっとつらい思いをしていると、想像を絶する現状に言葉を失いました。今までテキスト上でしか理解できていなかった私の想像力不足を強く後悔しました。しかし、1日目で世界のさまざまな出来事を自分事として実感を伴って落とし込むことができたおかげで、その後のイベントがより有意義なものになりました。

2つ目の私自身の成長に関しては、アメリカ・ニューヨークという立地にも関係していると振り返ります。一人で初めてアメリカに行くことは、最初はかなり抵抗がありました。銃社会であり、地下鉄に乗るのにも不安が付きまとうほど治安も心配されます。また CSW の特性上、大きなイベントを除いては参加者各自の自由行動が多いです。故に不安も大きかったのですが、百聞は一見に如かず。私が想定していたより治安は悪くなく、怖い思いもせずに帰国の途につくことができました。また一人でイベントに参加することで、議論になったときに頼れる人もおらず私の力量が試されます。このような状況から、私の度胸が養われました。周りに第一言語が伝わる人がいない中で物怖じせずに発言することや、現地の空気を感じて危険を回避することなど、日本では絶対にできない経験ができました。

私は CSW68 の経験を、法律の分野で生かしたいです。私は将来法曹界に身を置きたいと考えています。法律の分野は女性の割合が低いのが現状です。まずは私が法律家になることで、現状を改善する一助になりたいです。そして、同性に相談したいと思っているクライアントの力になります。DV 被害や離婚訴訟など、センシティブな問題は山積しています。同性に相談したいと思っても、そもそも女性の法律家が少なければそれも叶わない。そしてそのまま泣き寝入りしてしまうと、社会問題が顕在化しない。この悪循環を防ぐためにも私は法律家になって、女性のエンパワメントをサポートしたいです。

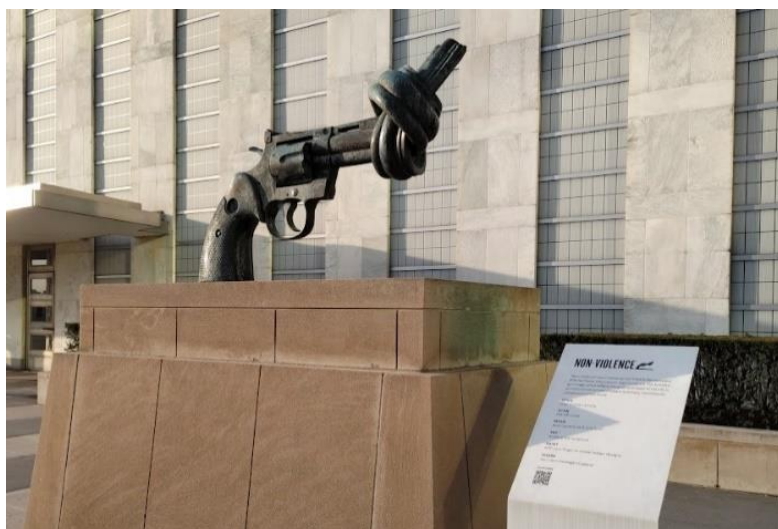
今回 CSW68 に参加して、世界は広いけれども抱えている問題の根幹は一緒であることを認識しました。私は女性の法律家の先駆けとなってまずは日本国内のジェンダー問題解決に尽力し、ゆくゆくは世界の諸問題にも向き合える人材になりたいです。

東上 菜々子

YWCAでの活動は6年目となり、現在はユース委員会のメンバーとして主に中高生向けに Rise Up!リーダーシップワークショップを企画運営しています。他にも日本 YWCA による YWCA フェスタでのワークショップ実施、世界 YWCA や他国の YWCA が企画するリーダーシップや世代を超えた対話をテーマとするイベントへの登壇やブログや SNS 投稿など地域、国内、世界レベルで活動しています。

CSW68に参加するにあたり大きく2つの目標がありました。一つ目がジェンダー平等や若い女性のリーダーシップについて現状を訴え、変革を求めることです。これまでの YWCA での活動で得た知識や自身の体験に基づき、日本の現状とジェンダー平等に向けた若者の取組を伝えたいと考えていました。政府や UN Women と接触できる貴重な機会でもあるため、構造的な暴力の元となる制度の抜本的な変革を訴えたいとも考えていました。もう一つの目標は、CSW 後に YWCA での活動を発展させるため、世界中の YWCA の仲間や他の参加者をつながることでした。各国の YWCA の仲間とはこれまでオンラインでのみ交流しており、直接会えることをとても楽しみにしていました。

たくさんの学び、気づき、刺激、つながりを得られる期待を胸にニューヨークへ渡航し、2つの目標を達成することができました。私たちのパラレルイベントや他の参加者との会話を通じて、日本のジェンダー格差を詳しく知らない方々に伝えることができました。現状を伝えるだけでなく、Rise Up!リーダーシップワークショップ等の活動も伝えることで今後一緒に若い女性のリーダーシップを養成し、声を挙げていこうと深い関係を築くことができた場面もありました。具体的には、Rise Up!リーダーシップワークショップに海外からの登壇者を招き、国際交流の機会を中高生に提供したいと考えています。



国連本部前にお気に入りのモニュメント。暴力のない世界を訴えています。

参加期間中、若者として、英語のネイティブスピーカーではないものとして、日本人として包摂性(インクルージョン)について考えさせられることが度々ありました。YWCA の活動では若者は中心に置かれており、CSW でも Youth Forum が開催されるなど若者が意思決定に加わることの意義や社会を変革していくリーダーであることは認識されています。ですが、いくつかのイベントでは若者にも深く関わる内容であっても発言者や登壇者の中に若者が少ないイベントがありました。また、言葉の面でも包摂性が課題だと感じるが多々ありました。英語がハードルとなり得ることは想定していたものの、専門的な用語が解説なく使用されている場面があり、内容を理解しきれない部分もありました。既に繋がりのある人々が多く参加するイベントでは「知っているよね」という調子でイベントが進んでいき、置いて行かれたような気持ちになりました。さらには、日本人としても包摂性について考える時間もありました。国連で使われる地域区分ではアジア太平洋に含まれますが、その中では存在感があまりなく、アジア太平洋からの事例として取り上げられるのは多くが東アジア以外の「アジア太平洋」であると感じました。この経験を踏まえ、アドボカシーにより一層注力したいと改めて感じるとともに、自身の活動が誰もが安心して参加できるものとなっているか今後より一層意識していきたいと思いました。

CSW 派遣プログラムを知ってから 6 年間、ずっと関心のあった CSW によりやく対面で参加することができました。コロナ禍中はオンラインで参加することができましたが、やはり比べ物にならないほど中身の濃い経験となりました。応募を迷っていましたが、背中を押してくださり、参加にあたって全面的にご支援いただいた YWCA の皆様に心からの感謝を申し上げます。

UN Women による Youth Forum。右下の黄色のボードが置かれた席は CSW に参加できない若者のための席。



柳 瑠音

私は、同志社大学で社会学を専攻しており、特にジェンダーについて学んでいます。およそ 2 年前、授業でジェンダー平等や平和についての活動に興味をもったことをきっかけに、インターネットで YWCA の存在を知り、その後は京都 YWCA にユース委員として「Rise Up!」や「夜カフェ」の運営を中心に活

動していました。個人でも、世界 YWCA のグループチャットで案内があった 3 か月間の「Hear My Voice Program — Women's network」というフェミニスト育成を目的としたオンラインプログラムに参加するなど、世界のユースたちと積極的に繋がってきました。そこでは、「発展途上国」と言われる国から参加している女性の方が、ジェンダー平等に関心があるということに驚き、そして彼らの国のジェンダー格差は「先進国」であるはずの日本より小さいなどということを知り、グローバルな視点とジェンダーの観点に立って、日本社会を俯瞰する必要性を認識していました。

CSWに参加した経緯については、昨年参加された三上奈桜さんのご紹介と、彼女のパワフルで幅広い活動に感銘を受け、上記に書いた経験と合わせて、私も彼女のようなリーダーシップのある女性になりたいと思っていたことが大きな理由です。特に、昨年私が自身の大学で多様性とジェンダーに関する学生団体「ジェンダーガーデン」を設立しはじめた際、彼女は団体の運営やワークショップをどのように行えば良いのかについて丁寧な相談にのってくださいました。「誰でも挑戦することができる」という言葉のもと、昨年度の秋からは中国の方に留学をしておりましたが、派遣メンバーに応募させていただきました。オンラインでの準備会では、時折私のインターネット環境が悪いこともありましたが、他の方々のサポートと連携を通して、着実に CSW での発表の準備を進めていきました。また、今回のユース派遣メンバーのなかでは、20 歳という最年少として参加させて頂き、メンバーから多くの学びと刺激を受けました。

CSW初日の本会議の様子



その日のインスタグラムで見つけた記事



派遣中は、多くのイベントに参加したり、自ら積極的に人に話しかけたりと、毎日活発に行動し続けました。国連職員や活動家、NGO 代表者、若者など、出身も経験も異なる素晴らしい人々の話を聞き、繋がり、ニューヨークに行かなければ出会えなかつたと思うほど、彼らの行動に、そして言葉にエン

パワメントされました。しかしながら、その一方で、数々の戦争やジェノサイド(民族浄化)が続く、世界情勢が非常に不安定で揺らいでいる時期のなかで参加した CSW では、ジェンダー平等、女性の地位向上という視点からも世界の意思決定を司る国際連合の脆さやその現実を垣間見てしまった気がしています。例えば、上の写真は 3 月11日の CSW 開催初日の本会議場の様子です。もちろん、テレビで見てきた夢のような場所で沢山の素晴らしいスピーチを聞くことができた嬉しかったのですが、最初の司会者を含む、最初の5人の登壇者はすべて中年男性(そのうち白人4人、黒人1人)で、彼らで計1時間ほど時間を取っていました。隣に座っていたイギリス出身の女性によると、去年は最初から女性のスピーカーが多かったそうで、ジェンダー平等を謳い、家父長制や人種差別の撤廃を促すよう働きかけている司令塔のような国際連合で、2024 年であるはずの今、いまだに女性軽視が明らかに行われている現実を目の当たりにし、夢の舞台に来たはずが世界の残念な現状を突きつけられているようで、後味の悪い出だしとなりました。このように、約一週間、国連職員や国連という場所に対して前向きな思い以外にも喜びや驚き、葛藤などの沢山の感情が一度に訪れ、沢山考え、悩み続けました。同じホテルに宿泊したメンバーとは、毎日議論を重ね、ジェンダー平等や性教育、海外の事情、その他多岐にわたる内容を共に深く考えることができ、理解しきれなかった部分を補ったり、知識をアップデートさせたりすることができ、そのディスカッションは毎日のイベント後の報告会のような癒しになりました。

3. 日本 YWCA 主催パラレルイベント

3.1. イベント概要

●日時:3月13日(水) ニューヨーク現地時間:14:30-16:00

●場所:CCUN Drew

777 United Nations Plaza, New York, NY 10017 アメリカ合衆国

●イベント名:

“The life stories of disempowered young women: hardship and leadership in Japan”(日本の若い女性が抱える生きづらさを考える)

●人数:対面最大45名程度

●イベントスケジュール

時刻	内容	担当
14:30-14:35	オープニング セーフペースルール確認	白杵 ふたば
14:35-14:40	個人プレゼンテーション 生理の貧困	住谷 友結
14:40-14:45	災害と女性の立場を考える	白杵 ふたば
14:45-14:50	広告から考える、性コンテンツと「女性らしさ」	柳 瑠音
14:50-14:55	家族のかたちと性の役割分担	片桐 碧海
14:55-15:00	女性研究者への道	小川 眞理絵

15:00-15:05	司法関連職における男女比率差と、その差が及ぼす社会的影響について	吉田 弥生
15:05-15:10	わたしのライフストーリー 生きづらさとリーダーシップ	東上 菜々子
	グループ分け	片桐 碧海
15:10-15:30	グループワーク① アイスブレイク(自己紹介) 発表への質問 意見交換	各グループ: ①臼杵 ふたば・住谷友結 ②片桐 碧海 ③柳 瑠音
15:30-15:45	グループワーク② 生きづらさを乗り越えていくため、社会を変えるための行動、リーダーシップのあり方を考える(アクションプラン)	④小川 眞理絵・吉田 弥生 ⑤東上 菜々子
15:45-15:55	グループで話し合ったことの発表	東上 菜々子
15:55-16:00	クロージング	東上 菜々子

3.2. パラレルイベント全体報告

報告:片桐 碧海

2024年3月11日(月)~3月16日(土)まで参加した第68回女性の地位委員会(CSW68)において、3月13日(水)に日本YWCAの平行イベントを開催する機会がありました。90分間とい

う枠の中で、「私たちが伝えたいことは何か」「私たちだから伝えられることは何か」について、2023年11月から4ヶ月間オンラインミーティングを重ねて考えました。熟考の末、日本で直面するジェンダー課題について7人のユースメンバーがそれぞれ自身の経験を共有し、課題解決や女性のエンパワメントのために取り組んでいることについて発表しました(写真1)。さらに、双方向的なイベントにしたいと考え、40分間(20分間×2回)のグループワークも設けました(写真2)。当日は約30名参加していただき、温かい雰囲気の中でパラレルイベントを開催することができました。ユースメンバー各人の発表では、生理の貧困、災害時の性暴力、日本における性コンテンツと性教育、家庭像とジェンダー役割、理系分野、アカデミア、法曹界における女性の生きづらさ、マイクロアグレッションについて扱いました。他の国とも共通する話もあれば、初めて聞いた、とおっしゃる方もいました。私たちの話に相づちを打ったり、賛同の声を上げたりする方々もたくさんいらっしゃいました。グループワークでは、まず自分たちの国や地域、自身や周りの方の経験について共有し、次にこれまで携わったアドボカシー・エンパワメント活動について共有し、ネクストアクションについて話し合いました。各参加者に色紙を配布し、お名前とネクストアクションを書いていただき、最後には全員で集合写真を撮影しました(写真3)。双方向的なセッションで楽しかった、勉強になったと、ポジティブな感想をたくさんいただき、とても嬉しく思いました。

(写真1)ユースメンバー発表の様子



(写真2)グループワークの様子



(写真 3)集合写真



3.3. 派遣メンバー個人の感想

臼杵 ふたば

日本 YWCA はパラレルイベント ”The life stories of disempowered young women: Hardship and leadership in Japan” を開催しました。

準備は 11 月から始まり、2 月末には日本の方へ現地での発表と内容と同じ内容でイベントを実施した上で、当日を迎えました。発表内容は発表者 7 名のこれまでの経験を発揮し、個々の想いを尊重できる内容であったと感じています。「生きづらさ」を感じていても一人ひとり経験や感じ方は異なり、リーダーシップの発揮の方法も異なります。だからこそ、一人ずつ時間を区切り展開したことは良い発表につながったと感じます。私自身もほかの 6 人の発表にエンパワーされ、練習する度に込み上げるものがありました。また参加者の方々も、とてもあたたかく見守ってくださったのが非常に嬉しかったです。イベント終了後には、「愛を感じた」「7 人の仲の良さが伝わってきた」という嬉しい感想をいただくこともできました。

今回、私にとって初めての英語でのイベント企画だったため、伝えたいという気持ちよりも正直不安の方が大きかったです。しかし、話し始めてみると、参加者が日本での私の経験に相槌をしてまで理解し、耳を傾けてくださいました。特に私は、日本の災害の状況や、痴漢について扱いましたが、「TSUNAMI」という単語が認知されていることには、改めて驚き、より日本での経験を伝える必要性を感じました。



今後の私の課題としては、多様な人がいるということをもっと認識した上で、発言することです。グループに分かれた後の、アイスブレイクでは自己紹介として①名前、②住んでいる国・地域、③“My favorite foods in NY”というものに設定しました。文化・倫理・宗教上などさまざまな理由を抱えていても、食生活に対して「favorite」という感情はあると推測したからです。しかし私の中に「健康上の理由で、食生活が制限されている」という観点が抜けていました。これに気がついたのは、参加者の中に健康上好きなものが食べられないという方がいらっしまったためです。私のこの設問によって傷つけてしまった可能性があることを考えると、申し訳ないという気持ちでいっぱいです。準備を慎重に行うことの意義を見直しました。

最後に、原稿の修正やアドバイスをくださった YWCA の職員・会員のみなさま、当日参加者して下さった方々、本当にありがとうございました。

小川 真理絵

参加が決まった 11 月から CSW への派遣の3月まで、パラレルイベントの準備を重ねてきました。毎月のオンラインミーティングでは、現段階の準備状況を報告し、悩んでいることを相談しました。日本YWCAの職員の方を交えたミーティング外でも、自主的に集まり、発表資料にコメントをしました。そのため、1人では出来上がらない発表内容に仕上がりました。

パラレルイベントでは、日本の女性が抱える生きづらさをテーマに、メンバーそれぞれが発表を行いました。私は、現在、博士課程に所属しているため、「女性研究者への道」と題し、理工学分野における女性の活躍、女性研究者への道、私のリーダーシップと3つのトピックに分けて、発表を行いました。

1人1人の発表が終わったあと、グループに分けられました。私(たち)のグループは、法曹界のジェンダー格差とその影響について発表を行ったメンバーと一緒にファシリテーターになり、「就労」について話し合いました。参加者は NASA や銀行といった、男性が女性よりも多く在籍する企業で働いていた経歴を持つ方もいらっしゃいました。

「研究職がお金になる(給料が良い)ことを発信することが女性研究者の拡大に繋がる」といった経済面に着目した意見もあれば、「他のことは気にしないで自分のことに集中することが大切」といった精神面に着目した意見も出ました。

私よりも社会人経験が長い方が多く参加していたためか、説得力がある意見ばかりで、こういう考え方もあるのか、と自身のキャリアを考える上でとても参考になりました。



また、私が印象に残っているものは、「小学校、中学校、高校と段階が上がるにつれて、男性の先生が多くなる」という意見に対し、ある参加者が「自分の子どもの先生は、女性で、非常に優秀な方だ、時代は変わってきている。」とっていました。日本よりも海外の方が、女性が積極的に働く印象があり、参加者の出身国・居住国における、女性の就労に対する考え方がディスカッションでは挙がると思いましたが、世界でも似通った課題を抱えていることがわかりました。最後の意見のように、時代は変わり、日本でも少しずつ就業の状況は改善され、女性の活躍の場が広がっていると思います。CSW で出会った方々は、働く女性のロールモデルになるような方ばかりで、とても刺激になりました。

片桐 碧海

日本 YWCA のパラレルイベントでは、「日本の若い女性が抱える生きづらさを考える」というタイトルのもと、ユース参加者それぞれが 5 分間で自身の経験に基づく日本国内のジェンダー課題について発表しました。私は、家族像とジェンダーの役割分担について取り上げました。日本の方を対象としたオンライン開催の際、日本で一般的である夫婦と子どもという「理想」の家庭像に違和感をおぼえる、と共有して下さる方々がいらっしゃいました。私自身、いわゆる「理想」の家庭像ではない家庭出身で、「理想」から逸脱したかわいそうな人、と認識してくる人たちの方が乏しい価値観しか持てないよっぽどかわいそうな人だと思っている、と話したところ大変共感して下さり、嬉しく思いました。これを英語にし、ニューヨークで伝えることは難しかったと思います。しかし、グループワークの際に米国、韓国、フィンランド、ナイジェリアの YWCA のメンバーが私のグループに来て下さり、それぞれの国で「理想」とされている家庭像について共有することができました。日本だけの問題ではないこと、少しずつ多様なあり方が認められるようになってきたこと、今回つくれた各国 YWCA とのつながりを大切に、これからも発信を続けていくことが挙げられ、とても温かい気持ちになりました。

今回のパラレルイベントは、大成功だったと感じています。ひとつは、発表を行うユースメンバーそれぞれが最も伝えたいことを伝える場にすることができたからです。次に、当日にトラブルなく、予行演習通りに実施できたからです。そして、グループに偏りなく、どこのグループも双方向的な議論ができたからです。全体を通して大成功だったというのは参加メンバーの共通認識だと思いますが、発表後に「自分をもっと上手くできるはずだった、申し訳ない」と泣き出すメンバーもいました。今回のユースメンバーは年齢や背景のバラエティーに富んでいました。みんなで毎日のように熱く議論し、学びをさらに深めることができたと思います。素直で、情熱と向上心のある素晴らしいメンバーと出会えたことをとても嬉しく思います。



発表の様子

住谷 友結

パラレルイベントでは、自分たちの経験に基づいたプレゼンテーションを行いました。発表の準備を進める中で、改めて自分たちが向き合ってきた課題の重要性を実感することができました。また、発表を通じて参加者の皆様と問題意識を共有できたことは、大変意義深い経験となりました。

発表後には、参加者の皆と一緒にグループに分かれてインタラクティブなディスカッションを行いました。他の参加者の方々の経験や視点に触れることで、私たちの理解が深まっただけでなく、新たな気づきを得ることができました。特に、各国の性教育の現状や生理の貧困という課題について、具体的な事例を通じて学びを深められたことは貴重な機会となりました。

ディスカッションの中で、これらの課題に取り組むためには、現地の医師、看護師、助産師などの専門家と協力しながら、きめ細やかな教育を実践していくことが不可欠だと感じました。また、生理用品の入手が困難な人々を支援するために、経済的に恵まれた層から募金をつのり、生理用品の配布やサポートを行うアイデアにも共感が集まりました。



私がこのイベントを通じて得た最も大きな学びは、女性や少女のエンパワメントに向けた取り組みにおいて、一人ひとりの小さなアクションが大きな変化を生み出す原動力になるということです。自分たちにできることを模索し、実践していくことの重要性を改めて認識しました。

吉田 弥生

私は日本 YWCA パラレルイベントにユース代表として参加して、日本の現状を伝えられた達成感と共に、自分の成長の余地を強く自覚しました。

私たちのパラレルイベントのテーマは「日本の若い女性が抱える生きづらさ」でした。日本を代表して参加できる貴重な機会なので、日本で生じているジェンダー問題を具体的な事例をもとに発表・議論しました。最初に自分たちのバックグラウンドを話して日本の現状を知ってもらいました。日本のジェンダー問題に関して世界的な理解はまだ及んでいないのか、日本でも問題が噴出しているとは知らなかったという声が聴かれました。その後のテーマ別のディスカッションにおいて、各国の現状や参加者の動

機を共有し、理解を深めました。私たちと話せてよかったという嬉しい感想を頂けたり、現状を共有する有意義さを認識できたりして充実した時間でした。

日本 YWCA 派遣ユースメンバー



自分の成長の余地に関しては、私は他の参加者と比べてジェンダーに関するバックグラウンドが薄い
です。大学では専門を法律に置き、大学外でも情報リテラシーなどに興味を持っていました。そのため、
CSW68 に向けての事前学習や本イベントを通してさまざまな知識を得られました。しかし、私の理解
力不足や言語の障壁もあり、すべてを会得できた自信はありません。故に、さらなる研鑽を積む必要が
あると感じました。YWCA のパラレルイベントでは、同じユースメンバーや職員の皆様の助けをいた
だいて無事にイベントを終えることができました。イベント後にフィードバックをしあい、お互いの長所や
もっと良くなる点を共有し、内容を深めることができました。心の底から良いメンバーに恵まれたと思
っています。今回のパラレルイベントを通して得た絆を大切に、これからも成長したいという決意を新た
にすることができました。

東上 菜々子

私は自分のライフストーリーを、自信を持って話すことができました。私が伝えたストーリーはマイクロアグレッションやジェンダーに基づく偏見による言動による生きづらいつと感じる経験でした。準備期間中も日々そのような言動にさらされており、生きづらさが増していく中で、辛い経験を話すことができるのかと不安になったことがありました。ですが、誰であっても生きづらいつと感じるような日本社会の現状を訴え、市民社会や政府に抜本的な改革を求めたいという想いが勝りました。練習を重ねた甲斐もあり、本番では自分の言葉で、参加者に訴えかけることができました。辛い経験に加えて、それを乗り越えるためのリーダーシップとしてYWCAで行ってきた「Rise Up!リーダーシップワークショップ」やセーフスペースとしての「夜かふえ」の取組を発表したことも自信になりました。

他のサイドイベントやパラレルイベントでも実体験を自分の言葉で伝えることの力強さを再認識しました。私のライフストーリーにより効果的に課題を伝えていきたいという想いを強くしただけでなく、私の周囲の人々が、人づてではなく自分でライフストーリーを伝えることができるように、セーフスペースをつくっていきたいと思います。

私だけでなく、7人全員がそれぞれの「生きづらさ」と「リーダーシップ」を、想いを込めて伝えることができ、その後のグループワークも非常に盛り上がり、イベントは大成功だったと言えます。海外から見た日本は、経済が発展した国というイメージがあり、ジェンダー平等には程遠い実態が知られていないと感じる場面がCSW参加期間中に度々ありました。イベントで7つのライフストーリーを伝えられたことは、現状を伝えるという意味でも重要だったと確信しています。



柳 瑠音

日本 YWCA のイベントでは、私は性コンテンツと性暴力についてスピーチしました。日本での痴漢などの性暴力の実態と、その背景にある過剰な描写を含む性コンテンツの危険性を世界の方々に知って頂きました。私は派遣メンバーとして発表するために国連の場に来ましたが、私は自分のパートで本領発揮が出来ず、心から後悔しています。連日の素晴らしいスピーチに圧倒されたせいか、私は自分のスピーチを直前に変えてしまいました。発表前は深呼吸もできず、頭が真っ白になってしまい、何度もかみ、原稿も忘れてしまいました。練習不足でした。しかし、本番は私の失敗を忘れるように、他のメンバーの方々が素晴らしいスピーチを行い、参加者の方を惹き込み、ワークショップは大成功になりました。圧倒されるようなスピーチをし、失敗ばかりの私のスピーチも許して下さったメンバーに心から感謝し、尊敬しています。反省会を碧海さんと弥生さんで行い、何がいけなかったのか、これからは発表やゴールに向けてどのような準備をすればいいかのアドバイスを頂きました。今回の CSW の発表は私の中では、100 点とは言い難い部分があります。それだからこそ、この経験をスタート地点と捉え、これからはアドボケーターとしての努力を怠らないと決心しています。



4. 派遣中プログラム参加報告

4.1. 現地派遣メンバー全員が参加したプログラム

<韓国YWCAの平行イベント>

日時:3月15日(金)12:30-14:00

場所:CCUN DREW

タイトル:Wartime sexual violence and the Post-War Feminist Movement (戦時下での性暴力と戦後のフェミニストムーブメント)

報告:小川 真理絵

韓国YWCAはパネルディスカッション形式で行われました。韓国YWCAよりEunkyung Kim Ph.D.さん、Hanbeet Rheeさん、日本YWCAより畠舞衣子さん、そして世界教会協議会WCC(World Council of Churches)からNisqi Ashwoodさんがパネリストとして登壇されました。

韓国YWCAの平行イベントでは、第2次世界大戦時に日本の占領下だった韓国での「慰安婦」問題と現在のウクライナにおけるロシアによる性暴力について扱われました。

最初に、韓国YWCAより「慰安婦」問題についての動画を視聴しました。動画は「慰安婦」問題についての全体の説明と実際に被害に遭われた方の声、人権活動家のKim Bok-dongさんの活動内容で構成されていました。

そのあとウクライナYWCA代表のNatalia Ulianetsさんがビデオメッセージで、ロシアが占領したウクライナの土地で、どのような性暴力が起こっているのか、実際のエピソードとともに説明がありました。

性暴力がいかに恐ろしいものか知った上で、韓国YWCAから「慰安婦」問題の詳しい説明や戦前から活動していたフェミニストが戦後は資金不足で活動が難しくなったことを学びました。また、日本YWCAからは、「慰安婦」問題について国内でいち早く取り組みをしてきたことについて説明がありました。

最後に世界教会協議会からは、聖書の中には女性を蔑視している記載があり、この部分を使って聖書を都合よく利用してきた権力者がいること、そしてそのような人には激しく抗議をするという内容を含むスピーチを聞きました。

日本 YWCA の活動としては、戦時中は天皇を神と崇める国家神道と関わるようになり、キリスト教を信仰する世界 YWCA との連携を止めたこと、そして日本の支配下であった韓国の YWCA も、日本 YWCA の傘下に入ったことを知りました。日本 YWCA は、過去の行為を反省し、その責任を受け入れ、啓発活動を行っています。「慰安婦」問題についていち早く勉強会を開き、真摯に向き合ってきました。過去に軍人や軍医だった方と協力をし、国会内で集会を開き、24 ある地域 YWCA では、地域の方とともに「慰安婦」問題について理解を深め、結果それらの活動が新聞やテレビといったマスメディアに取り上げられ、「慰安婦」問題の周知に繋がりました。戦争から 80 年近くたつ今日も、国家的な謝罪と包括的な補償を求め、教科書に「慰安婦」の記述を残す要望書を提出する等、積極的に活動を行っています。

日韓の交流も盛んであり、日韓ユース・カンファレンスが誕生し、2024 年 2 月に行われた第 21 回ユース・カンファレンスでは、「慰安婦」の証言などを展示する「戦争と女性の人権博物館」を訪れています。

韓国 YWCA のパラレルイベントに参加をし、男性による女性への性暴力を含む人権侵害の恐ろしさを改めて理解することができました。

私は、YWCA の行う「慰安婦」問題に関する草の根活動は、非常に大事なものであると感じました。古代ギリシャの哲学者ソクラテスが、「無知は罪なり」という言葉を残しています。日本では教科書から「慰安婦」問題に関する記述が消え、そもそも知る機会がありません。知る機会を作る「草の根活動」は、意味のあるものだと思います。

知る機会は、スマートフォンといったツールからでもできるようにみえますが、インターネット、とくに SNS では、自分の好みの情報の割合が高まるという宿命があります(フィルターバブル現象)。日本側でも韓国側でもない、中立な歴史的な事実を知る機会を、このインターネットの時代だからこそ、教育現

場が作り、その上で、学習者がこの「慰安婦」問題について考えることが、本来あるべき姿なのだろうと、教育に携わるものとして考えました。

<パレスチナ YWCA パラレルイベント>

日時:3月11日(月)14:30-16:00

場所:アルメニアンコンベンションセンター Y Room

タイトル: Illuminating the transformative impact of young women's empowerment on the resilient pursuit of rights and social well-being. A case study from Palestine. (若い女性のエンパワメントが、権利と社会的安寧のためのレジリエントな取り組みに与える変革的影響を示すーパレスチナの事例)

報告:住谷 友結

CSW68 に合わせて開催されたパレスチナ YWCA のパラレルイベントに参加し、現在のパレスチナの状況について理解を深める貴重な機会を得ました。



イベントでは、パレスチナの人々が直面している厳しい現実が生々しく語られました。特に衝撃的だったのは、教会が爆破され、身近な家族を失ったという参加者の体験談です。平和であるはずの礼拝の場が攻撃の対象となり、大切な家族の命が奪われるという痛ましい出来事に、言葉を失いました。

また、パレスチナの人々は日常生活において、深刻な移動の制限に直面していることも明らかになりました。国内を移動する際にも、ローカルポイントと呼ばれる検問所を通過しなければならず、自由な移動が大きく制限されているのです。

イベントを通じて、パレスチナの人々が「Enough is Enough(もう十分だ)」という思いを抱えていることを強く感じました。長年にわたる紛争と抑圧の中で、彼らが求めているのは自由です。しかし、過去から現在に至るまで常に支配下に置かれてきたパレスチナの人々にとって、真の自由がどのようなものなのか、具体的にイメージすることが難しい状況にあるのも事実です。

このイベントは、私たちに平和と自由の尊さを改めて認識させるとともに、パレスチナの人々が直面している複雑な現実について理解を深める機会となりました。国際社会の一員として、パレスチナの平和と人々の自由を実現するために、何ができるのかを真剣に考えていく必要性を痛感しました。

イベントを主催してくださったパレスチナ YWCA の皆様に感謝するとともに、平和と自由を求めるパレスチナの人々に心からの連帯の意を表したいと思います。私たちにできることは限られているかもしれませんが、パレスチナの現状を多くの人々に伝え、理解を深めていくことが、平和への第一歩になると信じています。

<世界 YWCA パラレルイベント>

日時:3月11日(月)16:30-18:00

場所:CCUN 10F

イベントタイトル:Dollars and Change: Investing in Grassroots Women for Social Transformation (資金と変化:社会変革のための草の根活動に関わる女性への投資)

報告:東上 菜々子

世界 YWCA によるパラレルイベントでは、CSW のテーマである女性の資金調達、特に草の根で活動する女性への投資についてのパネルディスカッションが行われました。登壇者は、フィジー出身で世界 YWCA 職員 Veena Singh さん、パプアニューギニアとインドで草の根で活動する若いリーダーの Naomi Woyengu さんと Vrushali Kadam さんでした。世界 YWCA の Victoria Khala さんの進行のもと、地域に密着して活動する女性が十分な資金を得てリーダーシップを発揮し、社会変革を起こした具体的な事例を踏まえながら、フェミニスト視点での資金調達の重要性が強調されました。

最も印象に残ったフレーズは、「フェミニスト視点での投資により、インドの地方の若い女性が CSW のような国際的な場で声を挙げる事ができている」という Vrushali さんの言葉です。私自身も、地域 YWCA での活動に加え、日本 YWCA、世界 YWCA、他国の YWCA とアドボカシーを一緒に行うことがあります。より大きな舞台で行動する際は緊張します。このような体験があるからこそ、地方から世界へ羽ばたいた事例に惹きつけられました。Vrushali さんは、「若い女性は資金を適切に扱うことができる」とも自信を持って発言し、まさにフェミニスト視点での投資によりエンパワーされた事例だと感じました。

また、「Rise Up!」リーダーシップガイド」など世界 YWCA が発行するさまざまなガイドブックや SNS でアドボカシーをするためのテンプレートが話題にあがりました。これらのツールが無料でいつでもウェブサイト上で閲覧できることは、貧困や資金不足に陥りがちな女性の草の根のリーダーたちにとって非常に重要だという指摘がありました。今まで意識していませんでしたが、私の京都 YWCA での活動も「Rise Up!」や「セーフスペースガイドブック」が土台となっており、簡単に手に入らなかったら今の活動ができていないのではと思い、フェミニスト視点での投資という課題が一気に身近なものになりました。

イベント終了後には、登壇者や参加者の中にいた各国の YWCA のリーダーたちと話すことができ良い時間となりました。



左から、Naomi さん、Vrushali さん、Victoria さん、Veena さん

<ユースフォーラム>

日時:3月15日(金)~17日(日)

場所:国連本部

主催:UN WOMEN

報告①:臼杵 ふたば

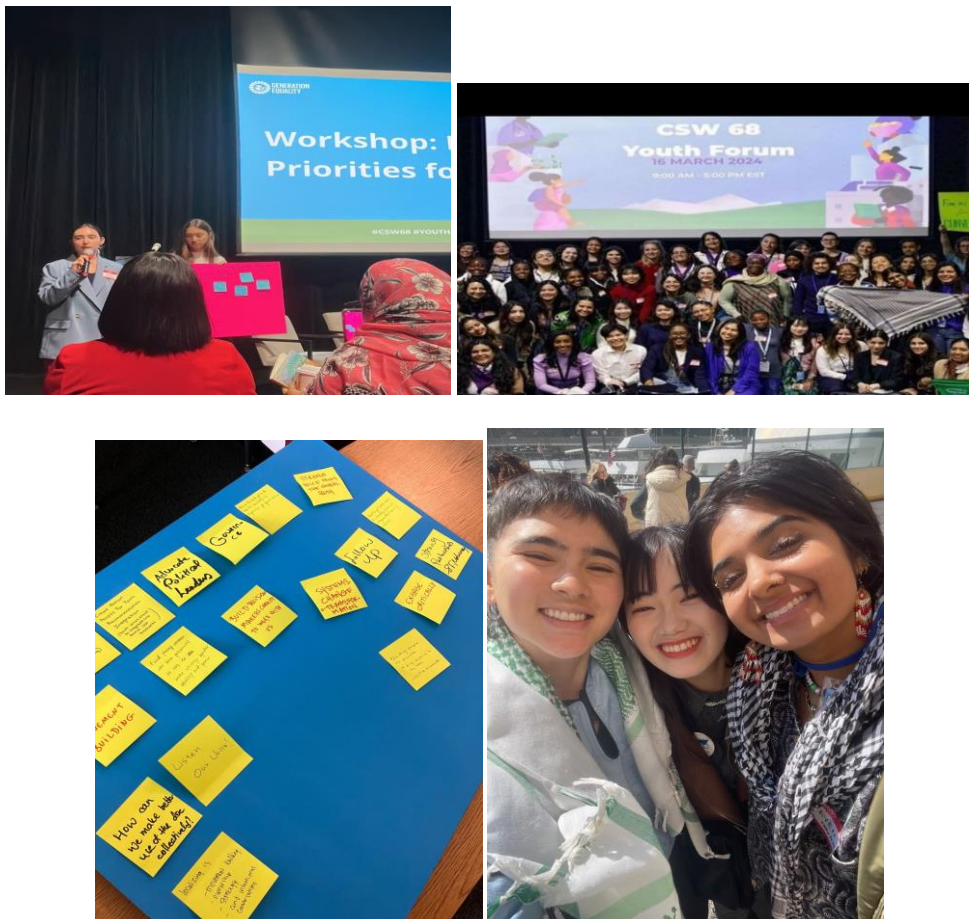
派遣メンバーは、ユースフォーラムに参加しました。3日間設けられており、私は1日目のオープニングに参加しました。1日目は、8名のスピーカーとモデレーター1名の話聞くという形式で、半数以上がユースのスピーカーです。堂々としていて同世代の方々の意見を聞くことで励まされました。ただ、彼女・彼らの話を聞いていても、正直社会が動く実感が湧かなかったのが実情です。会場内で、参加者で声を挙げるシーンもありましたが、社会は何も変わらない。ユースの声はどこで拾われているのか、この行動に意味はあるのか、ユースフォーラムは私の立場を消極的に考えてしまう時間になってしまいました。そのようなこともあり、2日目・3日目の出席はお断りしました(機会をくださったのにもかかわらず、参加しなかったこと本当に申し訳ありません)。

一方、成果もあります。ユースフォーラムの1日目に、日本のほかの派遣団のユースと政府ブリーフィング以来に再会したことです。その時に連絡先を交換し、派遣機関後も連絡を取り合い、来年開催されるであろうCSW69へ、向かう次期派遣メンバーへ引き継ぐため、CSW68であったことを記録していく作業を行っています。他にもアクションを起こすかもしれませんが、まずは今回を機に出会えた彼女たちとも少しずつ連帯して、まずは日本を動かしていきたいと思います。



報告②:柳 瑠音

今回のCSWで、一つだけ誇らしく自分に頑張ったと言えることはネットワーキングだったと思います。私は10日のプレップイベントや3日間のユースフォーラムに出席しました。そこでは、100人以上のユースが集まり、インタラクティブな企画が行われ、多くの人と交流することができ、一番濃い時間を過ごしました。ただ私は、精神的に疲れきっていたことから、並行して行われていたCommunity Care Collectiveという団体によるセーフスペースに長くいました。誰もが、どんな意見も言っていていい、弱音を吐いていいという優しい空間は私にとって必要なもので、一緒に過ごしたメンバーの4人とは今でもSNSで連絡をとるほど親しくなりました。そのメンバーにも加わり、その後は自身の大学で設立したGender Gardenのほうにセーフスペースを作って、Community Careの要素を取り入れています。



CSWが終了し3週間ほど経った今、ニューヨークで過ごした日々は幻だったのではないかと感じています。しかし、意外にもその一瞬に思えた時間や人々はそこで消えることなく、今もなお続いており、

CSWの参加が私に大きな影響と変化を与え続けていることを実感しています。

日本YWCAの皆さま、この度CSW68に派遣させて頂き、このような貴重な機会をくださったことに心から感謝しています。ありがとうございました。

4.2. 印象深かったプログラムの報告

臼杵 心たば

開催日:3月14日(木)

主催:シンガポール政府

タイトル:Empowering women at home, workplaces and the community:

Singapore's whole-of-society partnership to transform mindsets (家庭、職場、地域社会で女性に力を: 意識変革に向けたシンガポール社会全体のパートナーシップ)

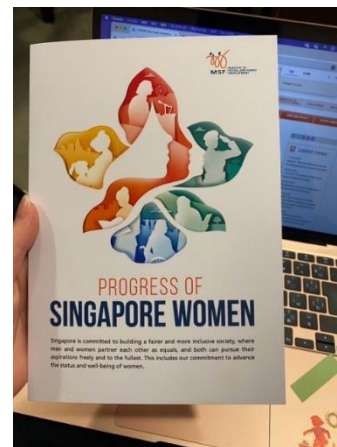
印象深かったイベントは、シンガポール政府によるサイドイベントです。職場や家庭、地域社会における女性のエンパワメントに対する、パートナーシップや支援方法に関してのシンガポール政府、NGO、企業の方がパネルディスカッションで報告していくイベントでした。印象的である理由としては、このイベントの「内容」と「形式」のどちらも、「対話」的であったと感じているからです。

まず「内容」という面において、女性支援のほか、ジェンダーステレオタイプに対して”fathering”という理論を用いた男性側の改善策、またそれらにはムスリムの視点が含まれていました。労働者の中心である男性と、宗教的視点が含まれるのは、資本主義経済国でかつ、多国籍国家であるシンガポールだからその取り組みであると思いますが、さまざまな視点からのアプローチを一度に聞くことができることは、合意形成の真の姿なのかもしれないと感じました。

そして「形式」という面においては、行政・NGO・企業が一斉に報告や意見交換をしていました。このスタイルは、CSWの各イベントの中でも珍しい形式であったと思います。NGOと参加者だけ(要は、市民だけ)、政府・国連関係者だけが発言する機会があるイベントが大半でしたが、私が参加したイベント

の中では最も発言者側のダイバーシティが担保されていたと思います。そして、それは「対話」そのものでした。

またイベントの発言者であった、社会・家庭開発国務大臣は、本会議関係の予定があり冒頭 10 分で退室されました。忙しい中、調整する姿勢に私は好感を持ちました。そして驚くことに、その後セッションを聞いていると、再度大臣は入室され、NGO の話を聞いているのです。



このイベントの内容がどれくらいシンガポールの国政に影響を与えるのかわかりません。しかし、NGO を含めたイベントに政府の意思決定層がどれだけ出席していたか、これによって今後社会が変わると思います。今回、他にも印象に残ったイベントはありますが、タレントがモデレーターをしているイベント、少女のための政策を白人高齢男性が話すイベントが見られました。これらに意義がないわけではないですが、発言権を持たない市民の声が拾われるような体制が整っているとは思えませんし、大きな

社会変革が期待できません。「対話」することから社会は変わるのかもしれない。シンガポールのイベントに出席し、そのように考えました。

小川 真理絵

開催日:3月14日(木)

主催:Federation Of Zoroastrian Associations of North America

タイトル:Strengthening Women's Independence: Investing in Financial STEAM and Health Education(女性の自立を強める:経済的な STEAM と健康教育への出資を通して)

ノーベル賞を受賞したマララ・ユサフザイさんが、“Education is the only solution. Education first”と教育の重要性を訴えたように、今回のCSWでも教育の大切さを語ったものが多かったと思います。

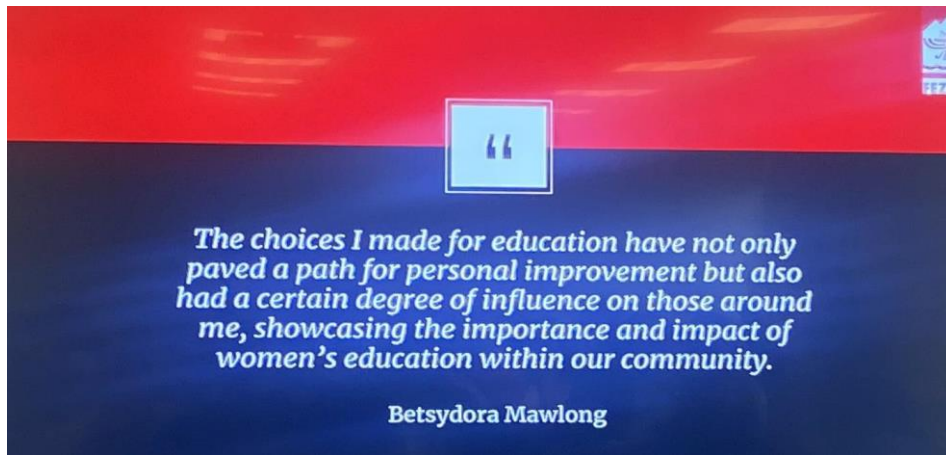
しかしその一方で、日本では、学校が男女の「らしさ」を身に付ける1つの場所になっていること、そして外国にルーツを持つ子どもやマイノリティの子どもへのアプローチの薄さが昨今は課題としてあげられています。また不登校児童も過去最多であり、『教育』は素晴らしいもの、といいながら、1つのクラスの中にあるカーストやいじめを考えたときに、そこまで万能なものなのかと、考えていました。

今回このイベントが印象に残っている理由は、教育が人生を変えたという実際のエピソードを知ったからです。その方は、インドの山奥に住んでいて、雑誌の片隅にあった奨学金の案内を見て、応募をし、経済的な援助を得て大学に行き、立派に看護師になり、今はインドの医療を支えています。このストーリーを聞いた時に、教育がたった1つの答えだ、というマララさんの言葉が分かった気がしました。

下の写真には、私がさきに紹介した女性(Betsydora Mawlongさん)の実際の言葉です。日本語に翻訳すると、「私が教育のためにした選択は、自分を高みへ導く道を切り開いただけではなく、周囲の人々にたしかな影響を与えて、私たちのコミュニティにも、女性の教育の重要性と影響力を示しています。」とっています。

私が考える教育の課題は「個人」に焦点を当てたものであるのに対し、このストーリーが示す教育は「コミュニティ」といったもっと大きなものに焦点を当てていることに気が付きました。

経済・資金の問題のように普遍的な課題から、時代によって異なってくる課題までさまざまですが、SDGsの目標4つ目にある「質の高い教育をみんなに」に対応していける教育を再度考えていきたいと思えます。



片桐 碧海

【韓国 YWCA パラレルイベント】

「慰安婦」問題をどう考えるか

CSW 期間中に参加したイベントで最も印象深いのは、韓国 YWCA による太平洋戦争中の「慰安婦」問題です(写真 1、2)。これまで私の知識は日本国内の報道から得るものが中心で、「日本は償いをしたのに現在も「慰安婦」の像を建てたり、問題に挙がったりする度に日本政府が反発することは当然のことだ」と考えていました。しかし、今回のイベントでは、男性による女性への暴力、人権侵害があったことに焦点がおかれ、戦後も男性中心の日本政府が女性に対して十分な償い(主に謝罪)をしていないことが説明されました。これを受けて、はじめて日韓の対立ではなく、男女の対立という見方が自分の中で生まれました。これに気づいたとき、はじめて問題の重要性、被害者の憤りをしっかりと認識できるようになった瞬間がありました。そして、これまでであれば「慰安婦」像の遭遇したとき、目をそらして通り過ぎていただろう自分が、彼女の目を見て、肩に手を添えたいと思えるようになりました。発表および質疑応答の中で、日本 YWCA メンバーから日本人としての謝罪の言葉を伝える場面もありました。これを受け、発表の後、日本 YWCA ユースメンバーで活発な議論が起きました。「日本の政治家による謝罪

の言葉があったではないか」「自分が関与していない問題に対して謝罪する気持ちにはなれない」という意見も出ました。まずは、知識を身につけなくては自分の意見を構築するのは難しいと考え、ホテルに戻り、同室の社会学、法学を専攻するメンバーと一緒に外務省の見解やこれまで国内で起きた裁判について調べました。その中で、過去に内閣官房長官(1993年)や内閣総理大臣(1998年)による事実認定と謝罪があり、日本の教育現場における平和教育に組み込む必要性が述べられた一方で、政治家の中には事実関係を否定する人もいて、閣議決定による政府全体としての事実認定、謝罪が行われたことがなく、ゆえに日本の教科書にもいまだに載っていないことが分かりました。金銭的補償は1995年に財団法人「女性のためのアジア平和国民基金」が設立され、フィリピン、韓国、台湾、インドネシア、オランダの被害者に対して行われました。この際、「誰を被害者として認定するか」が課題となり、財団と現地調整役の間で基準が設けられ、フィリピン、韓国、台湾では合計285名に対する補償、それまでに被害者数の把握が行われなかったため元「慰安婦」の特定が困難であったインドネシアとオランダに対しては高齢者社会福祉推進事業や大戦被害者生活支援事業への財政的支援が行われました。一方で、被害者認定においては認定してもらえなかった人もいることは容易に想像でき、実際にはもっと多くの被害者がいて、彼女たちに対する償いが行われていないと指摘が挙がるのは当然だと感じました。そして、日本国内で行われた裁判においては、事実さえ認定されなかったケース、三権分立の観点から認容に至らなかったケース、平和条約により戦争賠償の請求放棄が成立されていることから認容に至らなかったケースがあり、これまでの裁判はすべて請求が棄却されていることが分かりました。被害が生じた際にすでに存在した人権条約の違反と、どちらに重きを置くかの判断がどのように行われたのかは分かりませんでした。

イベント中、その後の議論や調べ物を通して、一番感じたことは、いかなる時も、誰しも、人権が侵害されることがあってはならない、ということです。そして、日本人として、自分と同じ国の、自分と同じ言語を話す人々が他人の人権をひどく侵害したことはとても恥ずかしく、申し訳ないことだと思いました。今回の学びを胸に刻み、これからも Peace and Justice の実現に向けて自分にできることは何か考え、行動していきたいと思いました。

(写真 1)韓国 YWCA パラレルイベントの様子



(写真 2)韓国 YWCA と日本 YWCA の交流会の様子



住谷 友結

【韓国 YWCA パラレルイベント】

開催されたさまざまなイベントの中で、私が最も印象に残ったのは韓国 YWCA が主催したパラレルイベントです。このイベントでは、戦時下における女性に対する性暴力の問題が取り上げられました。

ここで、第二次世界大戦中に日本軍によって行われた「慰安婦」制度について学びました。韓国をはじめとするアジア諸国の女性たちが、日本軍によって性的奴隷の状態に置かれ、耐え難い苦痛を経験したことを知り、深い悲しみとショックを感じました。また戦後長い間、この問題が十分に認知されてこなかったことにも憤りを覚えました。

他にも、現在ロシアによる侵攻が続くウクライナで、ロシア軍によって行われている性暴力について取り上げられました。実際にこの被害に遭った方の体験談を聞き、言葉を失うほどの衝撃を受けました。戦争という非常事態の中で、女性の尊厳が踏みにじられ、心身に計り知れない傷を負わされていることを、改めて認識させられる内容でした。

このイベントを通じて、戦時下における女性に対する性暴力が、決して過去の問題ではなく、今なお世界各地で起きている現実だということを痛感しました。同時に、この問題に対する国際社会の意識を高め、被害者の支援と予防のための取り組みを強化していくことの重要性を再認識しました。

韓国 YWCA のイベントは、私にとって非常に衝撃的な内容ではありませんでしたが、避けて通ることのできない現実を直視する貴重な機会となりました。

柳 瑠音

①韓国 YWCA パラレルイベント

イベントは、日本軍による性奴隷制と性暴力、戦後のフェミニスト運動についてでした。まず、「慰安婦」についての実際の経験と運動のドキュメンタリー動画を見ました。映像は、元「慰安婦」であった性被害者の方々の恐ろしい経験や強いメッセージが収録され、涙なしには見ることはできませんでした。パネルディスカッションの中では、日本 YWCA の畠さんが『慰安婦』という言葉は、加害者である日本軍の文書の中で使われている文言とおっしゃったことが非常に印象に残っています。「慰安婦」問題は日韓関係の問題として語られがちで、私はこれまで加害者側の日本という国籍のフィルターを通してこの問題と向き合ってきました。しかし、「慰安婦」とは、性奴隷のことであり、これは女性の人権侵害の問題で、私の問題でもあるのだと強く確認できました。戦後 79 年経った今、国連という場所で、CSW に派遣された日本国籍の 7 人と、日本の植民地支配を受けていた国々にルーツを持つ方々が共に同じ歴史を見つめたことは、平和を考え実現するうえで、非常に有意義なことであり、素晴らしい時間だったと感じています。

私は、中国と韓国を訪れる機会に恵まれ、平和資料館で日本の加害の歴史を学ぶことができました。侵略者、加害者側の子孫として、被害者側の歴史を学ぶことはもちろん苦しいものがあります。しかし、私たちは今、これからもその歴史を向き合うことで二度と戦争に加担しないという、それがこの国に生まれた宿命を背負い続けることができるのだと思います。

ニューヨークを立った後に訪れた、韓国・ソウルにある戦争と女性の人権博物館



②パレスチナ YWCA によるパラレルイベント

パレスチナ YWCA のパラレルイベントでは、イスラエルによるガザ地区の侵攻が始まる 10 月 7 日以前の、「Olive Tree Campaign」などの女性のエンパワメントに向けた取り組みが紹介されました。多くの女性の仕事の雇用機会や教育が行われていましたが、ガザ地区で起こっているジェノサイドによってすべてが変わってしまったそうです。写真に映っているパレスチナのマヤダさんはガザにいる自身の家族を虐殺によって失いました。ガザのことだけでなく、西岸地区でのイスラエルの支配による自由が制限された生活についても知り、川から海までパレスチナ解放を一刻も早くしなければならないと心から感じました。しかし、質問パートでは驚いたことに、そして残念ながら参加者のなかにはパレスチナで起こっていることを理解していない、またはハマス政権を責めるような質問も聞かれ、国連に来るような人々でさえ、さらされている情報にイスラエルまたはアメリカなどのプロパガンダが入っているということに気づいてしまいました。



パレスチナ YWCA 職員のマヤダさん

③アメリカ YWCA レセプション

開催日: 3 月 12 日(火)

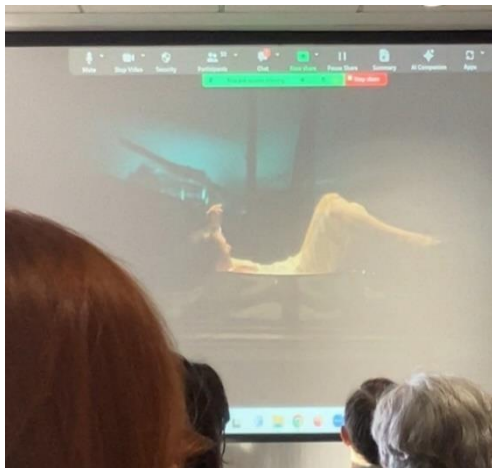
場所: Convene (237 Park Ave, New York)

主催者:YWCA USA

タイトル:Fireside Talk: Making a World of Difference (炉辺談話:世界を変える)

3月12日にアメリカYWCAによるレセプションイベントが行われました。各国のYWCAの代表が集まり、パネルディスカッションに参加した後、レセプションパートでは、多くの人と交流ができました。内容は、多岐にわたりましたが、先住民問題や南北問題などに関してどのように女性に投資すればいいのかというテーマについて話し合われました。ただ、個人的には世界YWCA加盟国の中にも優劣があるような気がしました。東アジアの日本YWCAや韓国YWCAは直接招待状をもらっておらず、英語ができるか否かの戦いの中で、すぐには理解することができない私は理解し質問し、交友を広げることは難しい部分もありました。しかし、レセプションでは、パレスチナYWCAの方々とは交流することができ、お互いの文化交流から始まり、彼らのプレゼンで疑問に感じたことや今パレスチナ、ガザ地区で起きている残酷な実態についての自分の思いと祈りを伝えました。パレスチナイベントではパレスチナの方々とは仲良くすることができませんでしたが、レセプションで親しくなることができ、心からパレスチナを救いたいと思いました。私の友人は「知らなければ、愛せないし、愛せなきゃ、守れない」という言葉を教えてくれましたが、パレスチナの方々とは出会って、その困難を知り、彼らに出会ったことで、パレスチナのためにできることはしたいと思いがより一層強くなりました。

④ウクライナのNGOによる戦時下性暴力についてのイベント



ロシア軍兵による性暴力に苦しむ女性をイメージしたビデオ



抗議する女性



警備員との押し合いによって肘にケガをした女性

イベントでは、ウクライナ人女性に対するロシア軍兵による性暴力に苦しむ女性をイメージしたビデオが流され、非常に強いメッセージを感じました。しかしながら、イベントの中盤では、ある国連職員のスピーカーが「イスラエルではハマスによる性暴力が起こっており、断固として阻止しなければならない」と話し、その後 15 人の参加者が「国連が嘘をつくときはいつもパレスチナの人が死んでいく」と抗議を始めました。抗議した人は警備員に部屋から追い出され、中にはもめあいになって、ケガを負った人もいました。確かに、ガザでは今イスラエル軍によって拘束したパレスチナ女性や少女に対するレイプ、その後の恣意的処刑が確認されているのに、スピーカーが話した内容の根拠はイスラエル側が提示したものに基いており、国連という場でプロパガンダが正当化されることは非常に不可解で悲しく思いました。

私は、今ガザ地区で起きているジェノサイドのことについて、CSW 参加前から非常に興味を持ってデモに参加したり、SNS で発信したりしてきました。しかしながら、国連ではこれだけ恐ろしく重大な問題が起きているにも関わらず、パレスチナことは軽視されており、パラレルイベントやサイドイベントも非常に小規模で少なかったことに、驚きと憤りを感じました。抗うことのできない権力と搾取される人々と奪われる命。聞きいれてもらうことのない叫びたち。世界平和のために存在するはずの国際連合が機能していない現実をひしひしと感じるばかりで、この場所に明るい未来を期待していたせいか、ショックも大きかったです。

その他デモへの参加を通して

しかしながら、午後から参加した二つのデモは権力に抗い、声を上げることの重要性を再認識させてくれました。国連の本部ビル前の広場で行われたデモでは、若者が多く集まり、ジェノサイドと女性や

LGBTQIA の権利を錯誤して、ピンクウォッシング¹をしないことを力強く訴えました。サイレントデモの方では約 200 から 300 人が参加し、列になってアメリカ大使館を囲みました。特に後者のデモでは、通りすぎる人とアイコンタクトがとれ、非常に多くの人々と連帯を感じることができたため、泣きながら行進しました。CSW 中に知り合うユースのなかには、政府から言動の自由を規制されている方もおり、心ではパレスチナ解放側に立っているがそれを表現できない方もいて、同じ思いである人々が多くいるのだと気が付き、彼らの立場も理解することができました。

また、DPPA(政治・平和構築局)の国連職員の方とも個人で繋がることができ、1時間ほどお話をさせて頂きました。前述したように、このような状況のなかで、国際連合は確かに脆さを感じる部分もありました。しかし、それでも依然として社会に貢献する素晴らしい組織であり、多くの職員が世界平和のために身を捧げ、ガザ、ウクライナ、アフガニスタン、スーダンなどだけでなく、他の地域の隠れた危機に取り組み、紛争を防いでいるのだと知ることができ、尽力されている方々に頭が下がりました。

国連の本部ビル前で行われたデモ



アメリカの大使館を囲んだサイレントデモに参加した時

¹ LGBTQ を支援している姿勢を積極的に打ち出すことでイスラエル政府がパレスチナ人への人権侵害を行っている事実を覆い隠し、同性愛者に厳しいイスラム文化圏に比べてイスラエルが人権先進国であるとして正当化するイメージ戦略のこと。

2010年にニューヨーク市立大学教授であり小説家のサラ・シュルマンが提言しました。出典：PRIDE Japan

吉田 弥生

開催日:3月12日(火)

主催:インドネシア政府、カタール政府、サウジアラビア政府、モロッコ政府、トルコ政府

タイトル:Advancing Women in the Judiciary(司法分野における女性の地位向上)

私が印象に残っているイベントは、”Advancing women in the judiciary” というサイドイベントです。インドネシアやカタール、サウジアラビアなど法整備が途上にある国の裁判官や法曹関係者が各国の現状をシェアしました。このイベントは3月10日の国際女性裁判官の日にも関連して開催されました。

私は登壇者の中の、カタールで裁判官をしている女性の話が印象に残っています。彼女はマフィアの抗争の裁判を担当し、法律上は正しい判決を下しました。しかし、逆恨みした構成員により息子が狙われ、殺害されてしまったそうです。裁判官として正しい行動をしたとしても、身の危険が脅かされる社会に恐怖を感じました。カタールで裁判制度が整備されたのは最近で、まだ反発も多いそうです。自分たちの問題は自分たちで解決するという伝統や風習がその要因だと説明されました。



イベントの様子

日本では裁判制度が確立していて、仮に納得できない判決だとしても控訴や上告を行い、制度の範囲内で解決を目指します。しかし、法整備が途上にある国では公権力に頼る前に実力行使をして問題解

決を図るという大きな差を感じました。制度として確立することはもちろん、それを市民社会に浸透させることも必要なことだと考えました。

また、女性の法律家は日本だけではなく、世界的に見ても少ないということを知りました。さまざまな国が自国の状況をエピソードや情報を交えて説明していましたが、一国も「女性裁判官は充足している」と説明した国はありませんでした。女性裁判官が少ない理由について、要件を満たす教育を受けていないことやそもそも女性の就労に懐疑的な(文化)環境であることなどが挙げられていました。理由は国によって多種多様だとは思いますが、職業の選択肢にないという国もあり衝撃でした。極端な例でいうと、「発展途上国」の子どもたちがみな教員や医師になりたがっているのはその職業しか知らないからであって、これと同じような現象が、法制度が整っていない国でも起きているそうです。将来の選択肢の中に法律家が含有されていないことが問題として挙がっていました。やはり、法制度を整備することはもちろん、裁判制度を周知させることの重要性を強く感じました。

東上 菜々子

イベント①

開催日:3月11日(月)

主催者:ユニセフ、イギリス政府、シエラレオネ政府、We Are Purposeful、UN Women

タイトル:What Adolescent Girls Want: Priorities And Solutions(若い少女たちが求めているもの:優先課題と解決策)

このイベントは少女にとっての教育の重要性に焦点を当てたイベントでした。マリ、ペルー、ドミニカ共和国、ナイジェリア、アメリカの若い女性とユニセフなどの国際機関の職員から教育が少女に与える大きな影響について発言がありました。

「教育はアイデンティティを確立するために重要である。」

「教育は不可欠だけでなく、さまざまな機会を与えることになる。」

「教育を通じて、少女は現状に疑問を抱き、現状を変えるために何ができるか問いかけるようになる。」

私が京都 YWCA で企画運営する Rise Up!リーダーシップワークショップでは、中高生が自分自身を理解することとジェンダー視点で社会課題を理解することを目指しています。これらの発言は、Rise Up!リーダーシップワークショップの目的と方向性が一致しており、中高生たちにとって非常に重要な機会を提供できていることが嬉しくなりました。同時に、Rise Up!リーダーシップワークショップが与える影響の大きさも自覚し、より良いワークショップを継続して提供していきたいと気持ちを新たにしました。

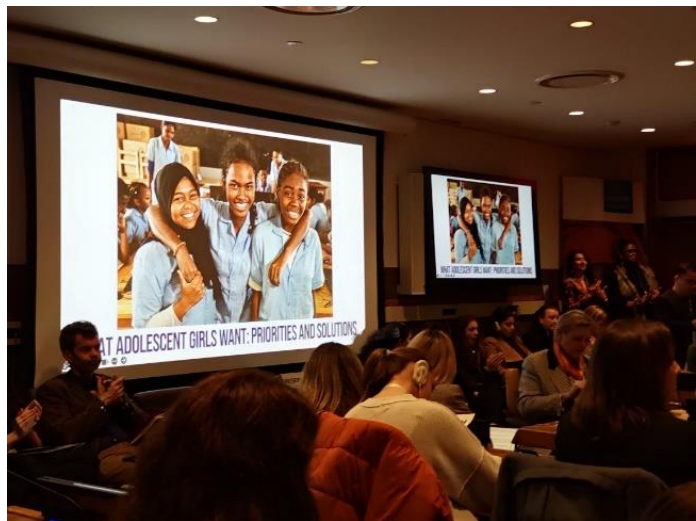
パネルディスカッション中、会場全体に投げかけられた問いがありました。

「もしあなたが 10 億米ドル(約 1,500 億円、2024 年 3 月時点)をどこに投資するか決めることができるなら何をしますか。」

「少女が直面する課題に対処しない場合の社会的損失はどのようなものでしょうか。」

少女や若い女性が教育を受け、社会を変革するリーダーになっていくことの重要性を認識し、実際に行動を起こしている政治家をはじめとする権力者がどれほどいるのかと考えざるを得ません。この問いかけは、少女や若い女性への投資、教育への投資が後回しにされがちな現状を再認識することに繋がり、今後重要性を訴えていきたいと強く思うきっかけとなりました。

このイベントは CSW 初日の朝に開催され、私が参加した最初のイベントとなりました。YWCA でも仕事でも若者の教育に携わるものとして、誇りと責任を感じるイベントで、良いスタートを切ることができました。



イベント②アメリカ YWCA レセプション

アメリカ YWCA 主催のパネルディスカッションとレセプションに招待いただきました。登壇者は産業界における女性への投資に精通する方、メンタルヘルスに精通する方など多様な専門分野を持つ方々で、これまで当たり前だと思っていたことが覆る場面がありました。

まず、ウェルビーイングについて、最近耳にする機会が増えましたが、現在ウェルビーイングとして語られることの多くは健常者である白人男性にとっての「ウェルビーイング」であると指摘されました。そして、社会制度や経済はその「ウェルビーイング」を実現するために設計、運用されており、メンタルヘル스에問題を抱えている場合は個人の問題に帰せられる現状があるとのことでした。「ウェルビーイング」は何となく良いものと思っていましたが、自分にとって幸せな状態、心地よい状態とはどのような状態なのかを理解する必要があると感じました。他に参加したイベントでも定義や根拠の設定に疑問を投げかける場面が複数あり、当たり前と考えられている現在の不公正な現状をおかしいと思っても、私自身が変わっているのではないと思いました。

パネルディスカッションの終盤には、女性への投資が話題となり、大企業への投資を女性が運営する小規模の事業に向けていく必要があると訴えられました。ここでのハッとさせられた発言は、「大企業は男女の賃金格差がある場合が多いため、大企業へ投資をすることは、投資が最終的に男性に有利に働くこととなっており、賃金格差がある構造を容認している」というものです。ここでもCSWのテーマである女性への投資を増やすよう行動を起こしていくことの必要性を非常に身近に感じるようになりました。



イベント③

日時:3月14日(木)

主催:Coalition of Finnish Women Associations NYTKIS、Finnish Federation of Graduate Women、National Council of Women of Finland、UN Women Finland、YWCA of Finland

タイトル:18th International Helvi Sipilä Seminar: Gender Responsive Budgeting
- The Core Tool for Gender Equal Future (第18回ヘルヴィ・シピラ国際セミナー: ジェンダーに対応した予算編成 - ジェンダー平等な未来のためのコアツール)

第68回CSWの優先テーマにはジェンダー視点での資金動員が含まれていますが、普段の日本での生活でも見聞きすることはあまりありませんでした。ジェンダー視点での資金投資について触れる機会が実際に少ないだけでなく、日々生きづらさを感じながら日本で暮らしていると、ジェンダー視点での資金投入を実施するための意思決定を想像することすら難しい状況です。ですが、このサイドイベントではその考えが覆りました。

フィンランドでは政策づくりの基準に、制度自体が差別的でないか、できる限り多くの情報を公開することが含まれています。また、縦割りを排し、政府内の省庁全体でジェンダー視点での予算建てができるように取り組んでいるとの報告もありました。ルワンダ政府からの登壇者は、ルワンダではジェンダー主流化が公的機関、民間企業、市民社会に浸透していると発言していました。そしてイベントの最後には、政府によるジェンダー視点での投資を現実のものとするためには、ただ待つだけでなく、市民社会が非常に大きな役割を果たすとの言葉で締めくくられました。

実際にジェンダー視点での投資や政策決定が実施されている事例と、市民社会が声を挙げ続けることの重要性を聞くことができ、大きな学びを得られました。

右はYWCA of Finlandからの登壇者



会場で出会ったYWCAのシスターたち



4.3. 期間中の SNS 発信

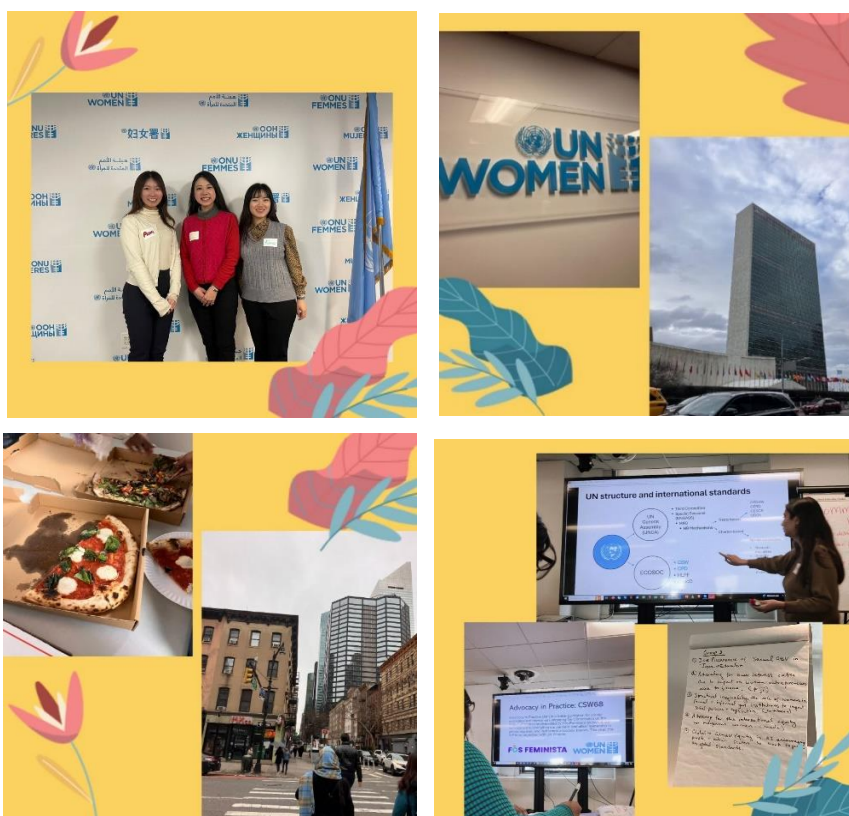
【3月10日—CSW 0日目】

本日、派遣メンバーはニューヨークに到着し、翌日からの CSW68(女性の地位委員会)に向けて、国連パスを取得したり、ユースメンバーに向けた事前イベントに参加しました！

私は、事前イベントに参加し、早くも刺激的な一日になりました🤔CSWとはどのような会議なのか、どのような姿勢で参加すればいいのかを学び、世界中からやってきた参加者と共に4時間みっちり学びました！とてもインタラクティブな(相互作用的な)空間で、多くの若者の女性がさまざまな議題について批判的思考に基づいて議論し合いました！

これが0日目なんて、CSWが始まったらどんな素晴らしい女性たちとアイデアを一緒に考えることができるんだろう💡と胸がワクワクでいっぱいになりました😊💕💕
これから1週間ほど、国連CSWでのメンバーの様子を投稿していきたいと思います💡お楽しみに！

京都 YWCA R・Y



【3月11日—CSW68 1日目】

11日から、CSW68 がスタートしました。

CSWとは、Session of the Commission on the Status of Women のことであり、世界中の gender equality を目指す人々が国連周辺に集まります。

この日は、日本 YWCA の派遣メンバーは、本会議のオープニングセッションを傍聴し、パレスチナ YWCA と、世界 YWCA のパラレルイベントに参加しました。

教科書で見ていた、本会議場に入れたことは夢のような時間で、初日にして、たくさんのフェミニストが、ご自身の経験や考えを述べる姿にエンパワーされました。

一方、国連でさえトップの顔は男性が並びます。そして、世界には自由を知らない人々がいます。(国連の本会議の様子は、中継されているので誰でもどこからでも確認できます。ぜひ現状をご覧ください。)

まだ初日ではありますが、今回の派遣を通して、これまでの関心に加え、「Peacemaker」というキーワードが自分の軸として確立しました。

人権が保障されるには「平和」であることが前提だからです。

フェミニズムと平和という視点で、世界を眺めてみようと思います。

派遣期間は、3月16日までです。この期間は、今後の自分、そしてすべての人々のために、今できる力を出して、知識とパワーを吸収していきます。

東京 YWCA F・U



【3月12日—CSW68 2 日目】

第68回CSW(女性の地位委員会)の優先テーマには、ジェンダー視点に立った貧困対策、制度及び財源調達に取り組みが掲げられています☞

女性という1つのアイデンティティゆえにいかに経済的、政策的に困難を強いられてきたかに焦点が置かれます。今後の指針についてあらゆる背景をもつ人々が集まり、話し合う機会が設けられたことは大変意義があると感じます☺

今回CSW68に参加し、より一層「インクルージョン」の重要性を感じました。これは多様性を実現する過程にすべての人が参加し、意見し、それを聞き入れてもらえることだと考えます。インクルージョン達成に貢献できるよう、CSW終了後も精進してまいります。

東京 YWCA A・K



【3月13日—CSW68 3 日目】

CSW68 3 日目はついに日本 YWCA のパラレルイベントがありました！

部屋いっぱいの参加者とともに、まずはユース 7 人が「生きづらさ」に関する意見を述べます。それぞれのバックグラウンドを踏まえて日本社会に対する問題提起を行いました。要所要所で参加者の方から拍手や同意の音があがり、会場全体を巻き込んだプレゼンとなりました。

イベント後半ではそれぞれのテーマに沿ったグループに分かれ、5~7 人で意見交換を行いました。私たちの紹介を聞いて思ったことや各国の現状などを、国連という多国籍の場を生かして共有しました。最後には自分たち一人一人ができる行動やリーダーシップを紙に書き、明日からの活動に繋げました。

イベント参加者の方からは、経験に基づいて意見を提示してくれたのでとても共感し、問題の重要性を

認識したという声や、他のイベントでは見られない、少人数のグループに分かれて話すことでより深い話もできてよかったという意見をいただきました。また、全員の伝えたいという意思、グループへの愛を感じてとても良かったという声も聞かれ、大変嬉しかったです。

パラレルイベントが無事に終わり、その後政府のブリーフィング、韓国 YWCA との会食もあり充実した 1 日となりました！

東京 YWCA Y・Y



【3月14日—CSW68 4日目】

わたしたちの CSW 参加期間も後半に入りました。

わたしは 14 日に 3 つのイベントに参加しました。

ジェンダー視点を取り入れた予算(Gender Responsive Budget)についてのイベントでは、フィンランドやルワンダの事例が紹介されました。ジェンダー視点が政策づくりや公私問わずさまざまなセクターに浸透していることをとても羨ましく思いました。

次に参加したイベントのテーマは職場でのハラスメントです。制度や組織自体に課題があり、女性がその

制度や組織に適応していくのではなく、声をあげ制度を変えていくことの重要性が繰り返し強調されました。

また、各国のユース代表等が参加する Youth Dialogue を聴講しました。1人3分と限られた中で私たちユースの声を届ける様子に刺激を受けたことはもちろん、身体障がいや言語に関して合理的な配慮のある場となっていたことが印象的でした。

京都 YWCA N・T



【3月15日—CSW68 5日目】

5日目は、韓国 YWCA のパラレルイベントに参加し、慰安婦問題や戦争における性被害について学ぶ機会を得ました。歴史に真摯に向き合い、過去の過ちから学ぶことの大切さを改めて感じました。二度と同じ過ちを繰り返さないために、一人一人ができることを考え、行動に移すことの重要性を再認識しました。

また、CSW68 ユースフォーラムのオープニングセッションにも参加しました。これまで CSW でユース向けのイベントがなかったため、世界各国のユースがここで集まったことをとても嬉しく思いました。

CSW での経験を通して、ジェンダー平等の達成には、政府、市民社会、若者など、あらゆるステークホルダーの協働が不可欠だと実感しました。一人一人が自分にできることを考え、行動に移していくことが求められています。

CSW で得た学びを胸に、日本に帰国した後も、ジェンダー平等の実現に向けて尽力していきたいと思っています。社会のあらゆる場面でインクルージョンの精神を大切に、誰もが生きやすい世界を創るために、自分にできることから始めていきます。

東京 YWCA Y.S



【3月16日 - CSW68 6日目】

17日は、セントパトリックデーですが、前倒して16日に盛大にNYでパレードが行われていました！街中、緑の洋服を来た方で溢れかえり、いつも以上に、ととにもぎやかな1日だったと思います。

日本YWCAとしては、16日が派遣期間の最終日でしたが、youth forumが9時から17時まで行われ、盛りだくさんの派遣期間となりました。

CSW68自体は22日の金曜日まで続きますが、ひとまずの区切りです。

CSW68では、想像以上の人との出会いと知識に恵まれました。

サイドイベント、パラレルイベントが多数行われ、当日の朝までどこに参加しようか迷うほど、魅力的なイベントばかりでした。

最初のころは、国連パスをタッチして、荷物検査をし、本部の中に入る、そんな瞬間に胸を躍らせていましたが、何日も繰り返すと、慣れてしまうものです。ですが、ふと考えてみると、本当に貴重な体験をしたと気付きます。

世界中から集まった方とともに、1つの空間で、ジェンダーの課題を分かち合う経験は、なかなかできるものではないと思います。

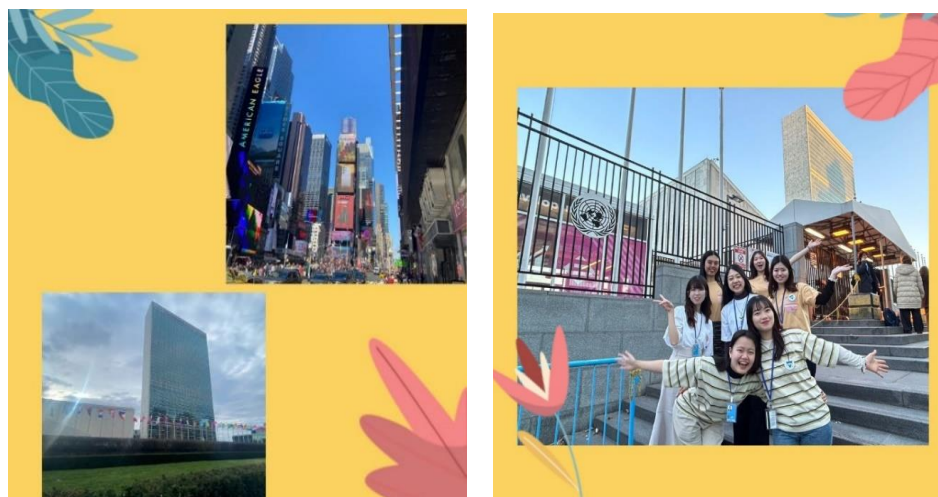
またジェンダーギャップ指数が 146 カ国中 125 位と、著しく課題が残る日本において、これほどジェンダーに関心があるユースメンバーとともにパラレルイベントを計画し、議論を重ねたことも良い経験でした。

今回サイドイベント・パラレルイベントを調べる中で、対面がすべてではなく、ハイブリット(対面とバーチャル両方)、バーチャルの形をとるものも数多く存在しました。

課題が残っているということは、進歩の余白がたくさんあるということです。

これからも、色々な形で情報の収集や学びの機会を得て、情報のキャッチアップを積極的に行っていきたいです。

東京 YWCA M.O



5. 派遣期間中の写真



3/10 無事に国連パスを入手した3人。左から吉田 弥生、住谷 友結、臼杵 ふたば



CSW68 初日開会式傍聴前の7人。

左から小川 真理絵、柳 瑠音、東上 菜々子、住谷 友結、片桐 碧海、吉田 弥生、臼杵 ふたば



パラレルイベント前の、最後の練習風景



皆で考えた、日本 YWCA パラレルイベントのウェルカムボード。出身地にシールを貼ってもらいました。



発表を待つメンバーたち。緊張が伝わってきます。



京都YWCA所属のシスターズ、発表後のありがとうのハグの一幕です。



3/13 発表を終えた後のほっと一息の一幕。この後占いの話で盛り上がりました。



3/14 パレスチナ YWCA 派遣者たちと、サイレントデモに参加しました。

ユースたちが撮った写真



パラレルイベントの予行練習を終え、夜食の大きな大きなピザを食べています🍕それぞれの表情に注目です。





夜のマンハッタン、ネオンライトを浴びてとても楽しそうです。



こちらはホットドック 🌭 食べる前の興奮が伝わってきます。



他の国からいらしたユースたちとの交流も CSW の醍醐味ですね。



学びのひと時の横顔

第 68 回国連女性の地位委員会(CSW)派遣報告書

編集・発行 公益財団法人 日本 YWCA 2024 年 5 月

〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台 1-8-11

東京 YWCA 会館 302 号室

Tel: 03-3292-6121 Fax: 03-3292-6122

E-mail: office-japan@ywca.or.jp

ウェブサイト:<https://www.ywca.or.jp/>

